



271号
新宿発

テロと日本の危機Ⅱ

戦後培ってきた基盤を
自ら失うな

奥平康弘

マスードとタリバーン 長倉洋海

特集 テロと日本の危機Ⅱ

人殺しの戦争やテロでなく羊の世話を 増田れい子	1
戦後培ってきた基盤を自ら失うな 奥平康弘	2
マスードとタリバーン 長倉洋海	30
読者の声 アメリカの「テロ報復戦争」日本の自衛隊派兵に反対する！	71
<hr/>	
■めじゃーなりすとのめ 人間らしく働きたい 中村正子	74
■試写室 内側から見たアフガニスタン 木下昌明	76
—『よみがえれカレーズ』(日本アフガニスタン合作記録映画)	
■沖縄から 朗読会でウチナーグチを 前原弘道	78
■語りかけたいあなたへ 切ない涙 大里知子	80
■TOPICS 自衛隊派兵、最大1500人を閣議決定 / 遺族年金、「働く女性」優遇へ改革か 他 ...	82
■集会から 女性議員が増えれば社会が変わる / 11・3憲法集会 他	85
■あごらのあごら	87

人殺しの戦争やテロでなく羊の世話を

増田 れい子

少年の名はグルバディン。十二歳。左足はもののつけ根から下がない。二〇余年にもわたる内戦中にアフガニスタン全土に埋められた一千万個もの地雷のひとつに触れたのだ。

少年は義足をつけてもらった。ヘラート郊外の難民キャンプにあるリハビリセンターで歩く訓練をしている。ユニセフ親善大使としてこの七月に訪れた黒柳徹子さんが、少年に問うた。「何をしたい?」。グルバディン君は答えた。「羊の世話をしたい」。はにかんだ。

九月十一日、米国中枢同時テロが起きた。テロの首謀者はサウジアラビア出身のイスラム原理主義者で、ソ連侵攻軍とたたかった元ムジャヒディン（戦士）、つまりは米国の盟友であり大富豪のオサマ・ビンラディン、との心証のもとに、彼をかくまうタリバン政権の消滅こそが正義の戦争であると、ブッシュ大統領は十月八日（米国の日付）、アフガニスタンへの空爆を開始した。

三週間で三千発のミサイルを投下、空からの地雷、クラスター爆弾も投下された。空爆は小やみなく続いている。死者はどれほどにのぼるか。タリバン側の発表では三週間で千人以上、米側は確認できないとの理由で発表しない。このほかに難民となった住民の疲労死や病死、ケガ、飢餓死はどれほどにのぼるか。国連の大島賢三事務次長（人道問題担当）によると、十月末現在六百万人が食料援助を求めており、うち六〇万人は深刻な状態にあるという。どうしたらいいか。

決まっている。空爆の即時停止、アフガニスタン全土での戦争行為即時停止。ついでテロの根本原因の除去、南北格差をなくすための一大変革だ。バーバラ・リー議員の言うように「わたしたちは悪を憎むあまりに、私たち自身が悪と化してはならない」のであり、この人間社会にとつての課題は、常に「人殺しの戦争やテロ」でなく、「羊の世話」なのである。ブッシュもビン・ラディンも「羊の世話」に還れ。

少年は人類の「希望」を語ったのだ。

●「テロと日本の危機」あこら緊急学習会報告 1

テロにも戦争にも反対する日本人として、私たちは何をどのように考えればいいのでしょうか。
（あこら）では、憲法学者の奥平康弘さんと、写真家の長倉洋海さんをお迎えして緊急学習会を開きました。貴重な内容を、参加できなかった方にもお伝えしたく、掲載します。

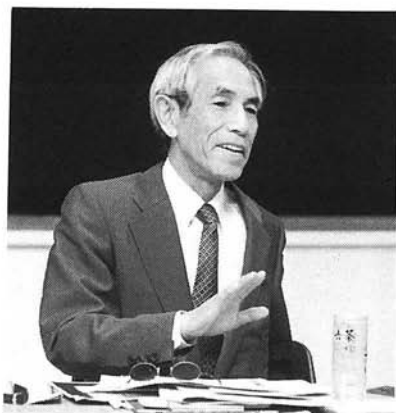
戦後培ってきた基盤を自ら失うな

奥平 康弘

テロ事件と憲法問題

今回のテロ活動に対応する日本の体制側が、あるいは多くの日本人が、「憲法問題なんてもういいよ」と言っているなかで、今一度、憲法問題を中心に置いて話してみたいと思います。

今回のテロ活動への対応は、結局、「良い」か「悪い」か、という問題にいきつくかと思っています。英語流に言わせていただければ、Right か Wrong か、ということであります。Right という言葉は「良い」あるいは「正当である」「正しい」という意味であると同時に、法律的に言えば、ある種の権利が一方の側にあるということ、他方の側では、それに従わなくてはならぬ義務がある、といった二ユ



倫理的・法的正義の後退

アンスを含んでいる。私たちは、いろいろなレベルで「良い」か「悪い」かという議論をしてきているのです。そこで、その際見過ごされている憲法問題、あるいは「法とはなにか」という見地からの「良い」か「悪い」かを、ぼくなりに照射してみたいと思います。日常茶飯事として、新聞では語られていながら、大きな議論の流れのなかでは何となしに見過ごされている問題がありはしまいか、というのを皆さんと考えてみたいと思います。

私たちの当面している問題を憲法問題に限ってみても、問題自体が非常に幅の広い、多角的にいろいろな方面から「良し」「悪し」を議論しうる、あるいは論じなければならない問題なわけです。ですから、ある角度からそれを話せば、あたかも首尾一貫したものと感じられるけれども、実際にそれは、首尾一貫したものにはならないで、勝手気ままな話になってしまう。極端な場合には——日本政府は今、それをやっているのだと思うのですが——これを機会に、別の目的をも、かすめとろうといった立場から、「良い」「悪い」を論じよう、という議論がありそうなのがするわけです。

実際私たちが、人間関係も含めた社会的な出来事、国際的な出来事を、「良し」「悪し」と考える場合には、意識するしな

いにかかわらず、おおまかにいつて三つの観点から判断しているようです。

ひとつは、政治的な観点です。ある種の政治的な目的があつて、そこから見て「良い」とか「悪い」とかを判断する。これは今回の問題で言えば、「国際政治から見て」ということになるでしょう。また、「アメリカの政治から見て」ということになるでしょうし、「日本の政治から見て」ということになるでしょう。

二つ目に、道徳的・倫理的の観点があります。倫理的に「良い」とか「悪い」とかという問題、今回の問題で言えば、倫理的な問題を頂点に、「人道的」という言葉が、つぎつぎと入ってくるわけです。こうした人道的、倫理的な立場から見て、それが許されるか、許されないか、といったことがある。これが事柄を判断する上での第二の観点だと思われまふ。

そして第三に、「法的に見て良いか悪いか」という問題があります。現在二一世紀の社会において、それぞれの国が一つのまとまつた国として成立する過程では、憲法を前提とした法秩序をつくりながら、一国を構えている。したがつて、国際的・国内的な問題について、「良い」か「悪い」かを判断する場合、それが権力的な発動の問題であればあるほど、「法的に良いか悪いか」という問題になります。

この三つのもの、すなわち政治的、倫理的、そしてそれらのものも踏まえた、法的な秩序の維持を前提にして、これまで処理してきたし、今も処理しなくてはならないし、将来も処理しなくてはならない。そのように議論しなくてはならないのにもかわらず、日本もアメリカも、そして世界的に見ても、政治的な問題が、非常に全面的に出てきて、倫理的な問題や法的な問題が、それに従属した形で、後から議論が展開されるようになっていっているように思います。

「神学論争」論の問題点

ぼくが今回特徴的だと思うのは——湾岸戦争にたちかえり、それと比較検討する必要があるのです——法的な議論をすることが、「神学論争」であつて意味がないのだ、言葉遊びだ、観念の遊びだ、ということですませてしまう傾向が非常に強くあるということです。それがたまたま、「神学論争」という言葉で表わされていると思うのです。

ここに二、三の知識人の発言を紹介します。例えば、軍事関係の評論家の女性には、「私は、日本の相も変わらぬ神学論争の洪水にうんざりしている。どうしてこんなに、やわで、近視眼的なんだろう。どうしていまだに、政策論と法律論とをこっちゃんにしているのだろう」と語っている。実際に、「政策論と法律論をこっちゃんにしている」のは、彼女のほうで、だから、「神学論争」だなどという決めつけをし、「近視眼的」と言っているのだと思います。

また別の論者は——この人は東京大学法学部国際政治の専門家ですが——「今のような日本の神学論争は、知的・政治的怠慢としか言いようがない」という切り捨てをしている。

そして今回の場合、もう一つ特徴的なことがあります。「テロ対策特別措置法」というのが、いよいよ参議院にまわっているその過程のなかで（十月十九日現在）、「いったい特別措置法を前提とする自衛隊の海外出動の、その憲法上の根拠あるいは自衛隊法上の根拠はどこにあるのか」という議論が、実はあるわけです。

そういう議論があるにもかかわらず、知識人の発言で気になるのは——これが、湾岸戦争の時とちよつと違うと思つているのですが——「憲法論議は、この際、先送りしても仕方ない」、あるいはあ

る人は、「アメリカでは危機の際に、これまで歴史的にリンカーンもルーズベルトも、憲法を無視してきているのだ。だから、憲法は危機の際には要らないのだ」と言う。これはアメリカの弁護士資格を持つている、ある憲法学の大学教授の発言です。

またこういう議論もあります。「法改正の正攻法は、集団的自衛権の憲法解釈を変更し、自衛隊法第三条の任務規定に、国際協力に関すること、という一項目を入れることだ。しかしPKO協力法と同様に、たまたま制限立法になってしまったのは残念だ。憲法上の根拠なしに、継ぎ足しでやってきたが、もつと積極的にやるべきだったんだ」というような議論。

あるいは、よく言われるように、今回の場合、小泉首相が「憲法との関係では、実は答弁に苦しい。そこには隙間がある」というようなことを言って、かなり意識的に憲法的根拠を議論しないまま、すませてしまう傾向があるように思います。

「個別的自衛権」論から「集団的自衛権」への移行

ぼくが、『あいら』（二七〇号）の巻頭でも言っていることですが、憲法研究者として、この間の事情を見ていて一番気になるのは、「集団的自衛権」というコンセプトなんです。この際いろいろな契機を積み重ねて、気がついたら、「集団的自衛権」の理論が確立していた、承認されていた、という過程をたどっているのではなからうか。そしてその「集団的自衛権」の理論が、「議論なしに受け入れられるべきだ」という話になっている。

湾岸戦争の時、旧社会党は、自衛隊による「国際貢献」の議論に乗ってしまい、そのために、少な

くとも「個別的自衛権」が承認され、それに基づいて自衛隊は存立し、したがって、その憲法上の根拠を問うことはナンセンスだ、というとなえ方がされるようになった。

「個別的自衛権」はもともと、一九五四年に「自衛隊法」がつくられた時に出てきた議論です。これは後でお話ししますが、この辺の議論がすつ飛んでいるから、「神学論争」などとされているのです。

一九五四年以降、この議論はおかしい、とずつと言われ続けたために、自衛隊の合憲性・違憲性をめぐる議論は続いたわけです。これは、「個別的自衛権」という理屈づけさえも、日本国憲法の考え方とは合わないのだ、という考え方があり続けたからです。

それに対して、七〇年代八〇年代にかけて、自衛隊が大きくなるにつれて、また日本のいわゆる経済大国化が進行する八〇年代に、「個別的自衛権」という考え方が邪魔になってくる。そしてこの枠組みが邪魔になった時に、「個別的自衛権」という考え方が、ほとんど一般的になる契機となったのが、湾岸戦争だったと言えるでしょう。

だから今さら、「自衛隊は違憲の疑いがある」、というようなことは言わなくなってきた。つまり、言えなくなる状況があったわけです。「個別的自衛権」というものは承認済みなんだ、という議論が確立してしまった。だから旧社会党も、それに乗ってしまった。

湾岸戦争以降、以上のことも前提に、村山富市元首相のもと、協力内閣が成立したのです。あの湾岸戦争の際、一般的に承認された「個別的自衛権」を前提にして、それだけを金科玉条にして法律を構成し、国会の議論も行なわれた。あの時も「神学論争」なんて言われたことがあります。いろいろな議論があったけれども、その過程で「個別的自衛権」というものが、唯一最大の憲法上の基礎として承認され、その枠組みを守りながら法律を作るのだという構えをつくってきた。それはPKO法案

に至るまでの諸過程のなかに、明らかに、くさびとして打ち込まれているわけです。だから、ややこしい法律になっているのです。一九九九年に成立した「周辺事態法」でさえも、なおその時のくさびが生きていて、「個別的自衛権でしかないんだ」という議論で、これまた、しちめんどくさい法律になっているのです。

ブッシュ政権からのプレッシャー

しかしながら、ここへきて今度は風向きが変わってきた。比較的最近、今年になって、すなわちブッシュ政権ができた頃から、この問題についてのプレッシャーのかけられかたが、非常にかわつてきました。日本でも、従来より「個別的自衛権」は手かせ足かせになっていて、「集団的自衛権」を實現するために、解釈改憲でいくか、さらにその先をいって、憲法改正に持つていくかということが、「周辺事態法」の段階において、すでに懸案でした。そういう背景があるわけです。こういう背景を、私たちはどうしても忘れがちなんです。

「テロ特措法」との関連で、突如、特殊な脈絡で「ひどいテロ活動じゃないか。それに対して、アメリカに協力するのはなぜ悪いか」などと言って、「集団的自衛権」へのスイッチが初めてなされたかのごとく思われがちですが、実際はそうではない。

「個別的自衛権」で確立した自衛隊を、さらに能動的に活動させるべく、「個別的自衛権では不十分だ。集団的自衛権でいくべきではないか」という議論が、八〇年代に出てきて、そして「個別的自衛権」による自衛隊の承認が、九〇年代に完璧に行なわれることを經由して、さらに九〇年代後半、

「周辺事態法」のあたりから、本格的に「集団的自衛権」でいこうではないか、という議論が出てきた。しかし、あの時はまだ、「集団的自衛権」の承認まではいかなかった。ここへきて今度は、「集団的自衛権」でいくか、解釈改憲でいくか、それとも憲法改正でいくか、という選択を突きつけられています。

いまのところ、立法の仕方自体に、湾岸戦争の時、「個別的自衛権の制約」と言われていた、その制約が、非常に曖昧になってきた。そのことによつて、「集団的自衛権」がいつそう展開する条件ができてきている。背後の歴史をたどれば、それ以外に考えられないほど明確だとぼくには思えます。ですから、「集団的自衛権へのスイッチ」が非常に気になります。

「個別的自衛権」の合憲づけ

以前には、多くの人が、自衛隊は憲法違反だと考えていました。そして解釈改憲の積み重ねで「個別的自衛権」は確立してきた。約五〇年前には、ご承知のように、「警察予備隊」があり、その次に「保安隊」があり、その次に「自衛隊」があるという、五〇年代初期の、慌しい自衛のための制度展開があったわけです。

「警察予備隊は、警察でしかないから、憲法に違反しない」という議論がありました。つまり、日本国憲法第九条でいう「陸海空軍その他の戦力は保持しない」の「その他の戦力」とは、「近代戦争を有効に戦う能力のことだ。警察予備隊も保安隊も、自国の国内秩序を守るだけなのだから、警察力であつてけつして近代戦争を有効に戦う戦力ではない」、と言われた。ところがその後には、「個別的

自衛権」という議論が一九五四年に出てきた。そういつたいきさつがあるわけです。

ところが、それは、もう過去の話になってしまつて、今私たちは、あまり意識しなくなっている。そうしたいきさつが、ほとんど吹っ飛んだのが、湾岸戦争の時だったということです。逆に言えば、「それはおかしいよ」と言い続ける人びとが、かつてのような革新政治勢力からの組織的な指示を得ることができなくなりました。そういう政治社会条件のなかで、ともかくにも自衛隊の海外派遣になんとかして歯止めをかける戦いに力を注がざるを得なかったのです。

「個別的自衛権」によって自衛隊を合憲づけ、さらにその自衛隊を「普通の国」の軍隊にするための一歩前進として、「集団的自衛権」にスイッチする、「個別的自衛権」と「集団的自衛権」を併せ持つものとして仕立て上げるといったことが考えられている。ですから、この問題が、いわゆる「神学論争」でないことが、おわかりいただけたかと思います。

けつこう短くない歴史、長い経過、さまざまな議論を積み重ねながら、しかし少しずつ体制側の議論が勝ちを占めてきた。しかし一方的に勝ちを占めたのではなくて、いろんなレベルで「自衛隊は違憲だよ、日本は永世中立を守るべきだ」という批判が、健康的に存在したからこそ、今でも、そういう世論を前提にして、政府自民党もアメリカも対応せざるを得ない。無風状態で自衛隊の確認が行なわれ、自衛隊の機能が変化したということではないのです。この間の歴史を、もつと中身に立ち入ってみると、次のようなことになります。

「個別的自衛権」とは、主として、一九五四年に自衛隊をつくった際、時の内閣、正確に言えば内閣法制局がうちだした憲法解釈なんです。憲法九条の第一項では、いつさい戦争をしない「戦争放棄」の規定で、それは「自衛戦争さえも放棄する」ということを言っているのです。

その解釈についても、いろんな説が歴史的にあります。第二項では、「戦争をしない」、「戦力を保持しない」と規定している。敗戦により帝国陸海軍が壊滅してから、ある時期までは、これが完璧に実行されたのです。「戦力」は、まったくゼロだったんです。そしてその状況は、ご承知のように、朝鮮戦争で崩れ、先ほども言ったことですけれども、まず「警察予備隊」が、次に「保安隊」がつくられます。そして一九五二年に占領軍がいなくなつて以降、日本は形式的に独立し、その過程で一九五四年、自衛隊ができあがる。

自衛隊の規定を改めて読んでみますと、「個別的自衛権」を前提にした「実力組織」と言っている。「軍事組織」とは絶対に言わないわけです。「軍隊」とも言わなかった。学校の教科書でも、そういうことを書かせなかった。

しかしながら、英語で言えば、どちらも Forces ですから同じなんです。Self Defense Forces と言って、決して Military Forces とは言わなかった。その Forces は、単なる「実力」であつて、決して「戦力」ではありません、という解釈を、学校の教科書にまで浸透させながら、「自衛隊法」はできあがつたのです。

超憲法的な「九条」解釈

この「自衛隊法」は、端的に言えば、第三条で自衛隊の任務を規定しておりまして、その第一項は、「自衛隊は、わが国の平和と独立を守り、国の安全を保つため、直接侵略および間接侵略に対し、わが国を防衛することを主たる目的とし、必要に応じ公共の秩序の維持にあたるものとする」という規

定です。このように自衛隊を任務づけ、性格づけているのです。

ここであらかじめ枝葉をカットしてしまうと、「必要に応じ公共の秩序の維持にあたるものとする」とは、簡単に言くと、「災害救助活動」あるいは「治安出動」です。日本の治安が乱れて警察では間に合わない場合、「警察的秩序」——国内の社会内部の秩序を維持するために、物理的警察力を持つている——を維持できない場合、また例えば災害が起きて、人びとが救助を求めている、あるいはさまざまな援助を求めている場合、そこへ国家の秩序を維持するために、付随的に、必要に応じて自衛隊を使うことができる。これは、いわば付随的な任務です。

では、それに対して、主たる任務はどうか。これが、「個別的自衛権」を前提にしている。「個別的自衛権」とは、当時の内閣法制局の解釈によりますと、なるほど憲法九条第二項では「戦力を保持しない」と言っているけれども、どの国家も、自らが「急迫不正」の外敵がわが国を侵略してきた場合、この外敵を、わが国土の外に追い出すことによって、自国を守る権利を持つ、これは憲法とは関係のないもので、およそどんな国でも持っている自然権だ。私たちが正当防衛するのは自然法であり、これはもう法律の規定の外にあるのであって、法律というのはそういうものを飲み込んでいるんだ、法はそれを前提にしているんだ、と。例えば、刑法でもって正当防衛の権利が規定されております。しかし刑法で規定されなければ、人は殺されっぱなしかと言ったら、そんなことはありえないわけで、刑法で規定されようとされまいと、昔からずっと、人びとには個人として自衛権があった。それを自然権と呼ぶわけです。政府は、そのことを、国家になぞらえるわけです。そうすると憲法で、「戦争は致しません。戦力は保持しません」、と言ったところで、自分の国を守る権利は自然権として備わっているんだという理屈を立てるわけです。ですから、超憲法的なのです。多くの言葉で言えば、憲

法の外に、九条の外に、議論を持つていくわけです。憲法上の文字の解釈では全くないのです。国家が国家である以上、自然権として、個別的に自国を守ることは最低限度の権利なんだ、という解釈を無理やり押し込んだのです。それが、「個別的自衛権」という観念だというわけです。人びとが平和な生活をしていて、そこへ突如不正な外敵が現れた時、間接侵略・直接侵略が起こる場合、それを国外にたたき出す権利がある。超憲法的に自然権があるのだから、したがって、その権利を行使する手段もあるはずだ、となる。自衛隊はまさに、この権利を行使する物理的手段だと言うのです。

日本の産業が発展し、GNPが高まると同時に、「軍事的装備」はますます強大化してゆき、いつも問題になる時、体制側は、「いや、これは自衛のための必要最小限の装備ですから、戦力ではございません」と言い続けたのです。

アメリカとの軍事的「一体化」

二〇〇〇年に入り、ブッシュ政権が成立した途端、アーミテージ国務次官などが日本に対し、さかんに牽制球を投げてきた。彼の議論によれば、自衛隊を成立させた時に、単に政策的裁量として「個別的自衛権」をとつたに過ぎない。一九五四年当時は、「ごちんまりいきます」という政策的判断によつて、「集団的自衛権」をとらず「個別的自衛権」に甘んじたに過ぎない、という意味です。そして「個別的自衛権も集団的自衛権も区別がない」、とも言つわけです。だから、「日本が単に政策を変えさえすれば、集団的自衛権を含めることは何も問題がないではないか、そうであることが理論的に自然ではないか」ということを、特に昨年から強力に言い始めたのです。

そうした議論は、日本でも八〇年代頃からずっとありました。さらにそれを、ブッシュ政権がぐい押し始めてきている。似たようなことを、(ランドコーポレーション) という軍事情報分析機関が、盛んに言い始めている。要するに、冷戦以後、特に二一世紀初頭のアジア情勢をどうするか。中国、いわゆる北朝鮮をどうするかで、日本を戦略的に位置づけるために、どうしてもアメリカから見て軍事的な「一体化」が必要である。そのためには「集団的自衛権」でいくほかない。

アメリカの立場からの「一体化」とは、自分たちが核武装も含めた巨大な軍事力を持ち、それを行使する際に、日本に後ろから支えてもらうこと、その場合、軍事戦略はシステムだから、戦略的に「一体化」して支えてもらうことを指す。例えば、後方支援として、必要な物資を補給してもらう。後始末のいろいろな事をやってもらう。やってもらわなくては困る。ここでの「一体化」とは、肩を並べて戦争することではないのです。

ロジスティックと盛んに言われます。いわゆるロジです。後方にいて、下っ端で物を運ぶだけで、前線でドンパチやることはほとんどない、あの役割をロジというのですが、それを日本にやってもらうとする。しかしその場合、全体の統合のなかに入っていないなければならない。「私たちは憲法に違反するからそこへ行けません」、と言ったのでは、「一体化した軍事力」にはなりえない。ロジとしての役割を、日本に果たしてもらいたい。そうしたことを前提にしたシステムをつくるというのが、「周辺事態法」で現れた枠組みなのです。

しかし、「周辺事態法」の時は、まだ、「個別的自衛権」が足を引っ張っていたし、今回の「テロ特措法」でさえ、その制約は存在している。「個別的自衛権」が足をひっぱっていて、「一体化」に限定を加えざるを得ない状況がある、と向こう側は言うのです。

日本側から見れば、「個別的自衛権」によって、自衛隊の強大な既得権を勝ちとってきた。それが裏目に出たのが湾岸戦争だった。「個別的自衛権」が手かせ足かせになって、彼らから見れば、法律が非常に狭いものになった。「後方支援」といっても、武器の輸送はしない、武器・弾薬は絶対に手をつけませんとか、「後方」といっても戦争の無いところでしかやりません、とか限定を加える。これは「個別的自衛権」による制約だ、これを突破しようではないかという日本側の勢力が、八〇年代から存在するのです。

そのチャンピオンが言うまでもなく、一九八五年に総理大臣になった中曽根康弘さんです。中曽根さんはさかんに、「集団的自衛権を承認すべきだ」、と言っている。

ただアメリカ側と日本側とでは、「集団的自衛権」の観念について、違いがあると思うのです。アメリカ側は、日本に対して「ロジでいい」と言っている。必要なことは「一体化」です。ちゃんと指揮系統に入って、危険なところへ行き、武器・弾薬も含めてカバーしてくれないと困る。その限りでの「一体化」であり、「集団的自衛権」である。

ところが、日本側は違う。中曽根さんが八〇年代からずっと構想し続け、そして日本側が湾岸戦争の時に狙っていた、そして今勝ちとうとして「集団的自衛権」は違う。それを、小沢一郎さんの名言「普通の国」の軍隊になるための重要な要素だと考えている。

相手国次第の軍事協力

日本の固有の「集団的自衛権」論者は、これを勝ちとりさえすれば、憲法九条の一項も二項も青天

井だ、つまり「個別的自衛権」だったら「急迫不正」な外敵が攻めてきた時、わが国を守るために、外へたたき出すものとして自衛隊はある、と言う。ところが「集団的自衛権」となったらどうなるかわが国の防衛は抽象化されて、自国と、例えばA国とが軍事協定を結んで、その結果としてお互いに「あなたのところへ敵が攻めてきて、あなたが戦争を始めたなら、その戦争を、私もお助けします。そのかわり、われわれに外敵が攻めてくる、もしくはわれわれが戦争を始めた場合、無条件で支援してください」となり、「個別的自衛権」に伴う「急迫不正」だとか、外にたたき出すという限定がなくなるわけです。つまり外国と示し合わせながら自国を守る。自国を守るためには、相手方と相互軍事条約を約束して、それに見合っただけでわが国を守る。集団的・間接的に守るということであって、法的限界はあつて無きがごとしです。

先ほど「青天井」と言つたのはそのことで、つまり相手国次第だということです。相手国との条約次第によつては憲法的限界をいくらでも超えられる。そのことはアーミテージ国務次官も言うし、わが国の「集団的自衛権」論者も、さかんに言つていることです。

集団的安全保障を常識とする「常任理事国」

次のような話も、必ず出てきます。「国連憲章では、明らかに個別的・集団的自衛権によつて自国を守ることを承認しているではないか。国際法全体の最大の決め手となる国連で、個別的・集団的自衛権を許しているではないか」。

ちなみに国連憲章を注意深く読んでいただければわかりますように、国連は、第二次世界大戦をド

イツ、イタリア、日本を敵として勝った国ぐにが、戦勝国的観点からつくった組織であり、かつそれを確立するためにつくられた憲章ではある。つまり大国的である。明らかに既存の利益を確保するしくみになっている。安全保障理事会の常任理事国が戦勝五大国だけであることを見れば、おわかりいただけると思います。

しかし、あの時代に国際連合憲章、安全保障体系をつくった時には、まだある程度夢があったのです。

安保理事會が、国連の名においてさまざまな軍事行動をする場合、それを国連軍と呼びます。

その国連軍が、いろいろな形で国際紛争を処理する。国連軍が国連軍として固有な形でそれを行なう。日本が九条によって、さっさと捨ててしまったコンセプト、「国家あるところ軍隊あり」、それなどのようにするかは主権者の裁量であるという十八、十九世紀的な「主権国家」論を、国連は維持しています。

それは、二〇世紀に入ってから、侵略戦争や、国際紛争を解決する手段として戦争に訴えることを次第に縛っていったものの、実際には軍隊が存在し、その軍隊が、その国固有の論理にしたがって戦争をするのは当然だとした上で、国際連合がしくまれているということです。つまり、国連軍も、安保理が統括して安保理の指令に基づいて、その手足になるよう、つくられたのです。

しかしながら、これが実際に、夢でしかなかったのは、五〇年代以降「冷戦」下において、ソビエト・中国の強い拒否権があったため、いかなる意味でもそういうしくみは、完全に動かなかったからです。それを見越してか、国連軍をつくって、新しい世界がつけられると言いながら、一方では、個別の国が暫定的に、「個別的自衛権」や「集団的自衛権」を行使することも許しています。つまり、

その限りにおいて、「集団的自衛権」が、国連憲章で正当化されているということです。

戦後、日本国憲法をつくるとき、以上のような個別的安全保障や集団的安全保障という觀念が、国際法で認められているということを百も承知で、「憲法九条」をつくった。ほとくの理解によると、国連憲章に「個別的自衛権」と「集団的自衛権」の規定があるのだから、当然にわが国も「集団的自衛権」を持てるのだという議論は、憲法無視の議論ということになる。

いずれにせよ、今回の事件の場合、アフガニスタンに向かって軍事活動をしようとしている。パキスタン経由で行くとか、陸上部隊を出すかどうかということ、今のところじわじわ検討をすすめている。米国の軍事作戦に対しては、イギリスがびたつくつついた。ブレアが明らかに何の留保も無くくつついた。そしてオーストラリアもびたつくつついた。それは、「集団的自衛権」の關係が歴史的伝統としてしつかりあつた上でのことなのです。

「個別的自衛権」と「集団的自衛権」とは、自衛権の名において、相対的な差と思つたり、またアーミテージ国務次官が言っているように、これは論理的な区別はないのであつて、あるのはただ政策的区別だけだ。政策的裁量を変えさえすれば、問題なく自衛隊を派兵できると考えがちです。

しかし憲法研究者からすると、「留保なく一体化して何でも約束をする集団的安全保障が国際常識だ」と言つても、それはあなたがた「普通の国」の問題でしょう。かつて、十八世紀から十九世紀の主権国家が、お互いに約束で取り結んだ關係で、それに基づいた戦争が行なわれてきた。それが「普通の国」がずっとやってきたことです。そうしたことが二〇世紀にずれこんできたのかもしれない。しかし、日本は「普通の国」とは違ふのだ。だから集団的安全保障にとびつけないし、とびついてはならないのだ、という前提がどうしてもあるのです。

日本固有の立場——歴史認識の大切さ

少し余談になりますが、先日、朝日新聞にインタビューを受けて一言述べたのです（二〇〇一年九月二五日）。二、三日置いて、この記事の關係だと思いますが、ワシントンポストの日本支局長から電話があつて、議論したい、と。その時、ぼくは次のことを強調しました。「私たち日本人からすれば、個別的自衛権と集団的自衛権との関係は相対的なものではない。個別的自衛権でしか、自衛隊の成立や任務を憲法的に説明できないものとして持ち出したものであり、この理屈でいきますからどうかお許しください、と言つてきた経過がある。国家あるところ国家を守るのは当然だ、これは自然権であり否定できないのだ——これは憲法の外から出てきた議論であり、ここに立脚した個別的自衛権によつて自衛隊を合憲づけてきた。これを唯一の体制側の解釈としてきた。その意味から、アーミテージの議論は非歴史的である」、と私は語りました。

要するに、第一に、私たちには、とにかくにも「個別的自衛権」による正当化論と約五〇年、対峙し続けてきたという歴とした歴史がある。これをきちんと背景に押さえておく必要がある。第二に、ブッシュ政権成立以降の強力なブレッツシャーという背景。第三に、小泉首相が意識的に「集団的自衛権」の実現をめざしているという背景。

私たち日本に、固有の歴史的背景があるということを、アメリカ人は知らない。そのことと、九月十一日以降の事態はつながつていて、このつながりを無視できないのではないか、ということを強調しました。また、「こういう憲法問題を持つていることは、わが国だけの問題ではなく、実は世界全体に関わつてゐる。そういうものとして、戦後、日本が進路選択をし、そういう日本を認めてくれる

ような国際社会になることは、究極的に、世界のためにもなるのだ」と言ったのです。途中からこの支局長は、「あなたの言うことはわかる」と言い始めました。

「テロ対策特別措置法」と「自衛隊法改正」の意味

ワシントンポスト支局長に、日本に固有の立場があることを説明したのは、次のような問題意識もありました。

最近の情勢でいえば、テロ危機があつたとたんに、NATO諸国がNATO条約に基づいて、アメリカと協調するしくみをつくつたことが報ぜられていました。NATO条約第五条に、そういうことが確かにあります。

締約国は、ヨーロッパまたは北アメリカにおける締約国の一つ又は二つ以上に対する武力攻撃を、全締約国に対する攻撃とみなすことに同意する。したがって、締約国は、右の武力攻撃が行なわれる時は、各締約国が、国連憲章第五条によつて認められている個別的または集団的自衛権を行使して、北大西洋の地域の安全を回復し、維持するために兵力の使用も含めて、その必要と認める行動を、個別的におよび他の締約国と協同して、ただちにとることによつて、右の攻撃を受けた一つ以上の締約国を援助することに同意する。

この規定を受けてNATOの締約国は、それぞれアメリカと協調した軍事力行使に移る用意がある、と言つたわけです。これはNATOの規定が示しているように、例えばイギリスが攻撃されたら、アメリカが攻撃されたものと同じものとして、イギリスの武力行使にこちらも支援するということを、

今回の場合は抽象的に議論しました。「アメリカが攻撃を受けた時、日本も攻撃を受けたと同じように理解し、共同行動をする」という考え方、これは「集団的自衛権」の締約国のすべてが多かれ少なかれ同じような軍事力を持つていることを前提としています。そうでなくては助け合う意味がない。

「集団的自衛権」というのは、多かれ少なかれ、だいたいにおいて平等に軍事力を持つということ、を当然の前提にしている。幸か不幸か、ヨーロッパ諸国および北アメリカ諸国は現実によさうです。憲法九条みたいなものはないですから。

今、日本もアメリカも、お互いの関係をNATO諸国のあり方に近づけたい、と考えている。そして「集団的自衛権」を認める方向へ、議論を一段上げたのが、今回の「テロ特措法」であり、自衛隊法の改正だ、と思うのです。どうしても、歴史的背景から見ると、こういう段階に至るために踏まれているステップだと理解せざるを得ない。

「抵抗の経験」を残そう

ぼくはテロの専門家ではもちろんですから、ではどうするんだ、ということとはなかなか言えない。しかし、「これはダメだよ」と言うことはできる。その声は今のところ弱い。けれども、こういう数々の意見があつたればこそ、湾岸戦争の時に様々な限定をつけたし、かろうじて国会の議論をまだなんとかやってゆける。ここで、「おかしい」と言い続けること、そういう声を残しながら、実際は可決されるかもしれませんが、そういう声が大きかったんだということを歴史に残し、私たちの経験として残すこと。それは時限立法も踏まえた将来の展望のなかで、ここで私たちが力を尽くさな

くては、戦後培ってきた基盤を自ら失うことになる。ここでたたかうこと、培ってきたものを再確認し、その基盤の上に「ダメだ、ダメだ」と言わなくちゃいけない、とぼくは思うのです。

司会　右傾化する日本国家を憂いてのお話、一言一言、胸に迫りました。ありがとうございます。テロ対策特措法が衆議院を通過した今日（編集部注　十月十八日衆議院、十月二十九日参議院を通過、可決）、私たちが再認識すべき重要なポイントを、明確にご指摘くださったことに心から感謝します。それでは会場から、ご意見やご感想がございましたらどうぞ。

「平和の文化」——多元的社会的条件

【質疑応答から】

◆解釈改憲への新たな動きが出ていますが、どうお考えですか。

改憲手続きには二つあって、ひとつは、国会衆参両院の三分の二以上の多数。これはこの間の参議院で既に議論がありながら、選挙では争点として絶対に出てこないのです。衆議院の場合もそうです。それでいて「三分の二以上とったら、改憲しよう」という話になっている。これも長い運動の過程で、三分の二取れないという経過があった。仮に衆議院で三分の二がとれても参議院ではとれないはずだ、という前提があった。だから個別的自衛権の立論で解釈を変えていった。

ところがこの頃、三分の二は衆参ともに歯止めではなくなってきた。後は国民がどう考えるか、と

いうことになりましたが、ひとつ重要な問題は、最後のところでも言った「文化」の問題です。

「平和の文化」は、相当なところまで浸透してきましたし、今も浸透している。例えば世論調査によれば、特に女性たちが、日本国憲法の持つている重要ないろいろな側面を、感覚的に受け止めている。その前提として、社会教育や学校の平和教育があったばかりでなく、マスコミも含めて日本独自の「平和の文化」を見せていこうという努力があった。これは成功しているのです。意外に私たちには見えにくいのですが……。

しかし二一世紀の日本も、世界も、多元的文化がますます重要になってくるを得ない。平和や戦争反対の意志を持つ、それを当然のこととする多数の国民がいる国は、二一世紀の重要な人と人、国と国との多元的文化交流をつくっていく基礎となるだろうと思う。「普通の国」になってしまつたら、それはできない。日本国民は多元的文化社会をつくっていく使命があるし、その客観的条件もできている。それは法的確信にさえなっていると思います。

「個別的自衛権」に歯止めをかけた「平和の文化」

◆「個別的自衛権」は、つねに「集団的自衛権」に転化していく可能性を持ち、「平和の文化」を食いつぶしていくことになると思いますが、どうお考えですか。

「平和の文化」、そしてそれを成り立たせている憲法規範観念は、体制側の「個別的自衛権」に対して、ある程度の歯止めを強いる文化でもあった気がする。こういう文化は依然として有力です。

例えば、自衛隊が現実の場で、とりわけ湾岸戦争で居直ったのは非常におかしいという考え方は、憲法研究者のなかでは多数意見です。自衛隊の出動を、「個別的自衛権で正当化できない」と、多くの憲法研究者は考えている。そして一般の人びとは、「憲法九条」を読み、九条から見れば、「戦力を保持してはいけない、いかなる意味でも戦争・武力行使はいけない」という、素直な憲法解釈を持つたうえで、政府の議論、「個別的自衛権」のいろいろな議論に対応している。

だからこそ、「個別的自衛権」はその枠内にかろうじて維持されてきたのです。もし以上のようなことがなければ、ことほどさように「個別的自衛権」をちんまりと維持することはなかったと思うのです。

「防衛機密の改正」に注意を

他方で、今回、「テロ特措法」だけが問題になっているようですが、新聞などでも読まれ、お気づきの方もおられるかと思いますが、「自衛隊法改正」もありますが、今のお話との関連で言えば、「防衛機密の改正」が重大です。「防衛機密」というコンセプト自体は、日米安保条約や日米軍事協定との関係で、「特別措置法」として存在していました。アメリカの秘密は日本の秘密だという、変な格好で個別的に存在しました。

「自衛隊法」でいう「自衛隊の職員が守るべき守秘義務」は、公務員の責任と全く同じだったので、国家公務員や地方公務員も同じです。「自衛隊法」の五九条第一項の現行規定は、「職員は職務上知り得た秘密を漏らしてはならない。その職を離れたときも同様とする」とあります。一一八項の一

項に、罰則が規定されており、「一年以下の懲役または三万円以下の罰金とする」となっています。これらの規定は、国家公務員法や地方公務員法の罰則と全く同じであり、言葉使いまで同じなのです。これは国家公務員だからという説明で成り立つわけです。

従来は、秘密を知りえた自衛隊の職員だけが、罰則対象者でしたが、今回の法案では、守秘義務対象者を広げました。「防衛秘密を取り扱うことを業務とする人びとで、この業務により取得した防衛秘密を漏らした者は、政治家なども含めて五年以下の懲役とする」と変更され、この点に関して、さらにわざわざ、「未遂罪も罰する」という規定も付けている。「過失によって罪を犯した者は、一年以下の罰則に処す」と過失まで規定している。「公務員法」には、そのかず、教唆する人への規定もあるのですが、今回それを格上げしまして、「秘密を漏らすよう扇動した者は、三年間の懲役に処す」。現行規定の三倍で、これは明らかに報道機関を対象に規定したものと思います。

こうしたことにも歴史的背景があります。過去、何回も「国家機密法案」が登場しました。八〇年代に出てきて、最後は「スパイ防止法」という名になって出てきました。これは結局いつも否決されている。この法案は一番ひどい時には、死刑まで規定していました。

「スパイ防止法」は、ここへ来て、「集団的自衛権」と全く同様に、アメリカ側が盛んに要請しています。「日本では、秘密が漏れてしょうがない。政治家は秘密をすぐしゃべってしまう。きちんと秘密防衛してくれないと、われわれと一体化できない。アメリカの情報が筒抜けになってしまう」——このように、今回のテロ活動以前から、盛んに言ってきた。そしてテロ活動以後、いっそうこの要請を強めています。つまり、「スパイ防止法」がないと「一体化」できない、アメリカの情報が筒抜けになってしまう、という話。これは、昔から日本で「防衛秘密特別法」をつくらうとしてきた人

びとの考え方と、びったり合うわけです。びったりあったけど、今まではできなかった。

それは、「軍隊なんていらんのだ。いらん以上、秘密など存在しない」、「仮に軍隊があったって、国家の政策上、優先順位を持つ価値ではない。軍事的価値は特別に保護される価値ではないから、軍事情報も特別に保護される必要はないのだ。だからこれでいいのだ」という考え方が、ずっとあったためでもあります。歴史的に、「国家機密関連法」がめっちゃくちゃに人びとの言論をしばってきたではないか、という平和主義が、憲法九条とびったりくっついていたからこそ、あの八〇年代の中曽根氏の勢いをもつてしても、「国家機密法案」は、全く突破できなかったのです。この点、「靖国神社法案」と似ています。

このように、「個別的自衛権」によって、ある程度承認されたその自衛隊に対して、「特別視してはならんのだ」という歯止めをかけたのは、「個別的自衛権の議論」ではなくて、「憲法九条の議論」なのです。私たちは九条に支えられた、すそ野の広い「平和の文化」に、もっと確信を持つべきでしょう。まんざら捨てたものではないのです。

どこまで司法を活用できるか

◆「武器なき平和」をどうつくるか。その場合の司法の役割についてお聞きしたいです。

九条の規定を堅持していくために、裁判所に押し立てていくような訴訟構造がつけられなくてはならない——これは非常によくわかるけれど、司法権を、国家全体の構造のなかで、いわゆる三権分立

のなかでうまく調和させていき、具体的な訴訟手続きをつくっていくことは、意外に難しい。

第九条について、ストリートに裁判に持っていく、裁判所が逃げることなく、ごまかすことなく、この問題について答えを出す状況をつくるのは、かなり難しい。たとえば原告適格をどうするのか、誰を被告として訴訟を起こせるのか、などが新しい問題になって出てきます。

憲法を改正して「憲法裁判所」を創設せよ、という意見が強いのですが、私たちはこれに幻想を抱いてはいけません。体制側は、てっとり早く自分たちに都合のいい憲法裁判ができるようなシステムをつくりあげる可能性があるからです。

結構厄介な問題が伏在しているのです。司法権というものは、良かれ悪しかれ、後始末的な、非常に狭い領域の役割しか果たせないのかもしれない。そしてその狭い領域を突き抜けて、「ここで勝負するしかない」という性質のものでしかないのかもしれないのです。

「集団的自衛権」——近代主権国家の「あだ花」

◆連邦制が平和の障害になっており、それを崩さない限り平和を守れないのではないのでしょうか。

ヨーロッパの場合、必ずしも連邦制の国ばかりではないわけです。フランスなどその典型的な例です。そういうフランスも含めてNATOで「集団的自衛権」にぴたっとまとまってしまふ。何かあると、軍隊がさっと出ていってしまう。このような「集団的自衛権」がありうるということは、連邦制かどうかとは、必ずしも関係がない。

むしろ「近代的主権国家」のコンセプトの延長上に、「主権国家の権力行使は自由なのだ」という考え方が出てきて、そのあだ花として咲いたのが「集団的自衛権」なのではないかと思うのです。

「憲法と現実のギャップ」は世界的な問題

最後に、締めくくりの話になりますが、ぼくは憲法の研究者として、湾岸戦争に至る前まで、「九条問題」に、ほとんどノータッチだったのです。というのは、この問題は軍事的側面と国際的側面が絡まりあっているし、ぼくが主として研究してきたのは、いわゆる「基本的人権」であり、また、「国民は国家に対してどんな権利を持つのか」という問題でした。

つまり、軍事問題からかけ離れているところにある憲法問題に関わってきました。ずっとそういうことを専門にしてきた人間なのです。したがって、「九条問題」は、ぼくのなじみとしている憲法問題と、ぴたつと合うわけでもない部分がある。そういう意味から、これまで対応が消極的だったのです。でも気がついたら「九条問題」について、他の人が話さなくなったので、ぼくが発言せざるを得なくなってきた。ぐいぐい押されて、気がついたら「九条問題」が、ぼくにとって、切実な憲法問題になっていった（笑）。

ぼくはなるべく一年に一度、アメリカ・ニューヨークに行つて、「充電期間」を過ごすようにしています。今年も行つて、友人の憲法学者と少人数で会ってきました。

その時ぼくは、彼らに、次のように言いました。「日本の憲法研究者にとってユニークなことは、憲法九条を、憲法問題として抱え込んでいることなのだ。現実と憲法のギャップが大きくて、現実に

合わせたらテキストの意味が全くなってしまう。そして、現に全くなっていく過程ばかり見えていて、これではいかんのだと言いつけなくてはならない憲法を、私たちは持っている。私たちはそのことで苦労しているのだ」と。

そうしたら多くの尊敬する若い友人が、「いや、おれたちにだって、そういった問題はあつて、一緒だよ」と応じてくれました。実際そうなんです。

例えば政教分離の問題を一つとってみても、キリスト教の国ですから、その原理に矛盾することが、当たり前のこととして行なわれているのです。学校のなかでの政教分離に関すること、学校のなかでスポーツ選手が運動する前に長い儀礼を行うことに関わってなど、長い議論がある。他にもジェンダーの問題があつたり、生・死に関係することなどがあり、それらが憲法問題として出てきて、人びとの考え方が、たくさん分かれている。「これがどうして憲法問題なのか？」という問題が、たくさんある。だから「日本だけがユニークなのではない」、と言われたのです。憲法学者はこうした「憲法と現実とのギャップ」の諸問題を、一つ一つ拾っていかなくてはならないし、これはどこの国でも同じなのだと思いました。

アメリカの場合、「第九条」を持つていませんが、戦争宣言するのは国会であり、軍事を統括する最高司令官は大統領です。そして「戦争とは何か」という問題も含めて、大議論がある。ただ、アメリカは今回のテロ活動に対して、それらをすつ飛ばしたわけです。「戦争と憲法問題」というテーマは、彼らにもあるのです。私たちだけの問題ではなくて、「世界的な問題」としてある、ということですね。アメリカの憲法学者が、私たちの悩みに共感してくれたのが印象的でした。

マスードとタリバーン

長倉 洋海

司会 大阪・神戸・名古屋などからも、たくさんの方々がおいで下さってありがとうございます。今夜は、今最も事態が危ぶまれているアフガニスタンに、二〇年前から深く取り組んでいらした長倉洋海さんをお迎えしました。今日のテーマのマスードさんは、長倉さんが寝食を共にされた大親友です。マスメディアには伝えられていない貴重な真実を話していただけたと思います。

自爆テロリストに倒されたマスード

長倉 今年二〇〇一年九月十一日にニューヨークとワシントンの事故があつて、アメリカに対しての自爆テロの問題で、アフガニスタンは今、世界の注目を浴びている、という状況にあると思います。ただ、その二日前の九月九日に、これからお話しするアフガニスタンの反タリバーン連合の指導者、アマハッド・シャー・マスードが、同じような自爆テロで、ジャーナリストを名乗るアラブ人二人によるインタビューの最中、ビデオカメラに仕掛けられた爆弾によって倒されました。



当初マスードは、生きていたという話もあって、一縷の望みを持っていたのですが、残念ながら、その日のうちに死んでいったということがわかりました。

テロリストは、マスードを殺すために近づき、そして確実にそれを成し遂げたことになりました。それが自爆テロであるということで、イスラムの狂信派の仕業であると思われています。この時、マスードの周りには四人いたのですが、二人はアラブ人の犯人です。ひとりは、通訳として外務省から来ていたアシム。あとのひとりは、アフガニスタンのインド大使のマスード・ハリリでしたが、彼だけが生き残り、かなりの重症で、今ドイツで治療を受けています。彼が
一か月くらい経ってから、やっとインタビューに答えられるようになって、その時の状況がわかりました。

「あなたがカブールに進軍したら、オサマ・ビンラディンはどうするつもりか」という質問に、マスードがきちんと答えようとした時に、爆発したそうです。

マスードがもうこの世にいないことは、僕にとっては非常に悲しいことですが、彼が目指していたこと、またなぜ戦いを続けていたかということを含めて、今日はお話したいと思います。

イスラム教徒は、テロはしない

マスードが僕にいつも言っていたことは、タリバーンあるいはオサ

マ・ビンラディンは、本当のイスラムではないということです。どうしてかというところ、イスラムのコーランに関して、非常にひどい解釈をしているからです。

自爆テロというやり方にしても、みなさんご存じだと思いますが、イスラムでは自殺を禁じています。また、イスラムの考え方では決して罪のない人を巻き込んではいけません。また、できるだけ人を殺さないように、たとえ敵でも殺さないように、と教えています。そして、何事も、人と相談して決めなさいというのがイスラムの教えです。

マスードは、最高司令官ではありませんでしたが、独裁者ではなくて、最終的には、住民の命を巻き込むような大切なことは、シュウラ（住民代表による評議会）の決議に従ってきました。ですから、イスラムの教えにあるとおり、マスードは生きようと努力してきました。もちろん、マスードは超人ではありませんから、肉体的にも非常に苛酷な状況にありました。去年別れた時は、睡眠時間もないような、寝ても一時間くらいな大変ななかにいましたが、やはり、イスラムへの信仰というのが彼のなかで大きな支えになっていたと思います。

その彼からみると、タリバーンあるいはオサマ・ビンラディンのやり方、例えばマスードに対して彼らはジャーナリストを装って近づいて来て、卑劣なテロをしたということに、僕はすごく怒りを覚えました。同じイスラム教徒なのに、意見が違う人間を殺そうとする。自分たちに従わない人間、あるいは主義が違う人間を排除しようとした姿勢というのは、マスードに対してだけでなく、アフガン国内で彼らはたくさんやってきたことだと思いますが、決して許されません。彼らは聖戦だと言ってきましたが、同じイスラムに聖戦はありません。

ですから、今回の問題は、彼らが本当のイスラムではないと捉えておくことが、大切だと思います。

世界のあちこちで、現実には、オサマ・ビンラディンの写真を掲げて、ヒーローとして人びとがいます。ただ、それは、多数ではない、と僕は思います。大部分のイスラム教徒、コーランをちゃんと理解している人びとは、対立するのではなくて、世界の人びとと共に生きていこうとする気持ちを持っています。

マスメディアが誤って伝えるアフガニスタンのイメージ

マスードは、アフガニスタンの再建が第一だといつも考えていました。イスラムの精神を生かしながら、今の時代にあるよいものは取り入れていく。例えば選挙や女性の権利を含めて取り入れていく。そして自分たちの独立・自立が保証されれば、他の国と仲良くしていきたいと考えていました。

オサマ・ビンラディンが、ニューヨークの自爆テロに、どのくらい関与しているのか、私は正確にはわかりません。ただ、犯人は、アフガニスタンに集まったテロリストか過激派原理主義のグループに連なっていることは、ほぼ間違いない。ビンラディンが命令してニューヨークをやったのか、ビンラディンが単なるコーディネイト役であったのか、あるいは、お金を出しただけなのか、その関与の度合いもわかりません。もっと大きな国際的組織が関与していたという説もあります。

マスコミの報道を見ていて、私は毎日カリカリ怒っています。この新聞、こんなこと書いている、抗議しなくてはいけないと思って、イライラしているのですが、忙しくて、全部に抗議しきれずにいます。このあいだも、マスードが、積極的に民族抗争・対立に関与していた、という記事がありました。僕がずっと見てきたマスード、あるいは知っている限りのマスードは、一度もそういうことが

ありませんでしたので、抗議の電話をかけました。「これは、どこから出典があったのでしょうか」と聞きましたら、その人は偶然僕のことを知っていて、「長倉さんに言われたら、返すことばがありません」と答えていました。そのように答えるなら、では何故それを書くのだろう、と僕は本当に悲しくなりました。

今まで世界が無視していたアフガニスタンが、急激に注目を浴びて、例えば、新聞や雑誌などで、たくさんページを割かなければならないようになりました。アフガニスタンのことを知らないですから、いろいろなものをパーツと読んで、自分のなかで組み立てて、わかったように紹介しなくてはならない。しかし、果たしてそれで本当にアフガニスタンの姿が伝わるのか。

もちろん僕だって、十回以上行つて、何百日か暮らしても、あの複雑なアフガニスタンの状況をすべてわかると言えないのに、一度もアフガニスタンを訪れたことがない人が、さもわかっているかのように、「タリバーンが台頭して来たのは、前の政権が酷かったからだ」と、一言で片づける人がいます。私は、その人に向かって、「あなたは、そのときカブールにいたのか。そして、その酷さはどういうもので、背景にあるものは何か、検証したのですか?」と言いたいのです。

その人の意見は、実地で検証されたものではなくて、他人が書いたものを読んでいるにすぎない。要するに伝聞です。誰かが書いていることを、他所から持つてきて自分の意見にしている。そういうことが、マスメディアには非常に多くて、私は憤りを覚えます。全部のマスメディアに抗議したくないです。

日本のマスコミもアメリカもそうですが、〈北部同盟〉は寄せ合い所帯で、だめだとか、だれだれじゃだめだとか、パシウトウーン人の声を聞かないとダメだとかを、勝手に言っています。当たり前

のことですが、アフガニスタンのことは、アフガニスタン人に聞けと言いたくなります。その声を聞く場、いわば「舞台装置」を設けるのが、世界や国際機関の使命だと思いますが、日本のメディアは、なかなかそうしたことに言及しません。

ただ驚いたのは、先日、イギリスが、アフガン再生のための基本四項目というのを発表しましたが、その一項目に、「アフガニスタンのことはアフガニスタンが決めるべき」というのがありました。この点につきましては、すごいなと思いました。当たり前なのだけれど、メディアでも、街頭でも、このことが、本当に守られていません。ですから、イギリスがすべてよいわけでは、決してありませんが、それについては、非常に評価したいなと思います。

今回の事件が起きる前から、日本でアフガニスタンをずっと研究してきた方、あるいは、日本にいるアフガニスタンの人や、在アフガン人と話をする、「アフガニスタンのことはアフガニスタンに」、周りの人間がとやかく言うべきではない、という意見で一致することが多い。マスメディアでは、アフガンが注目されたから、急に記事を増やしていますが、文字どおり、どれも地に足がついていないものが多い。現地の人々の声を聞かないで、伝え聞いた情報だけが再生産され、実体を欠いた情報だけがひとり歩きしているような構図があるんじゃないでしょうか。

もちろん、日本人の私がアフガニスタンをどれだけ知り得ているかといえば、ほんの一部でしょう。日本に関してすら、全国各地を訪れているわけではなく、どこまで「日本」を知り得ているかわかりません。その私が、アフガニスタンに何度も足を運んだとしても、知り得る情報というのは、ごく僅かでしょう。だからこそ、「アフガンのことはアフガン人に」という姿勢は、本当に大切なものだと思います。

アフガニスタンは、典型的な多民族国家

アフガニスタンに関して、みなさんにまず理解していただきたいことの一つは、今、新聞報道では、パシュトゥーンという民族が多数派であるとされています。ですから、パシュトゥーン抜きにはアフガニスタンは語れないし、(北部同盟)はパシュトゥーンがいないからダメだというように書かれています。パシュトゥーンというのは、私が学生時代、一九七五年、一年ほどアフガニスタンで生活していたことがあるんですが、そのときに、パシュトゥーンはアフガニスタンの六割から七割とされていました。それが今、三八%とされています。ということは、パシュトゥーンが子どもを産むのをやめたのか、それとも、他の民族よりも極端に人口増加率が低くなければならないはずでしょう。ところが、そうではない。

アフガニスタンという名は、もともと、「アフガン、つまり、パシュトゥーン人の国」という意味で、パシュトゥーンの人たちがつくった王国が最初です。パシュトゥーンが支配民族だったので、実際の数よりも、多くいるように発表していたのです。それが六割か七割という数字なんで、その後、少しずつ是正され、アフガニスタン人のなかでパシュトゥーン人が占める割合は、三八%から四〇%とされています。

しかし、在日アフガニスタン人にその話をする、「何を言っているんだ。タジク人が四〇%で、パシュトゥーン人は三〇%しかないよ」と、根拠を挙げて言う。「パシュトゥーン人は軍事・政治を握ってきたんで、彼らはいつも自分たちの勢力を誇大に言う。彼らは、パキスタンのパシュトゥーン人(パタンと言われている)を含めて計算しているんだ。われわれウズベクも、ウズベキスタ

ンのウズベキ人を加えればもっと増えるよ」と。アフガニスタンでは、まともに人口統計がとられたことがないので。

確実に言えることは、アフガニスタンは、多民族国家ということです。その民族構成は、アーリア系のパシュトゥーン族(推定三八%)、ベルシャ系のタジク族(推定二五%)、モンゴル系のハザラ族(推定一七%)、ウズベク人やトルクメン人(一〇%)など、と言われていきます。したがって、パシュトゥーン人の声も聞かなければならないが、この人たちの声だけを聞いていればよいというものではない。「アフガニスタン再生」を言うとするれば、パシュトゥーン人以外の人びとの声も念頭に入れないといけない。それが「再生」の原点です。この原点を見失って、周辺国が利害で政権をつくろうとするなら、後のちまで禍根を残すことになるでしょう。ちなみに、マスードはタジクの出身です。

*

それではスライドに移りたいと思いますが、新聞・テレビで「アフガニスタン」というと、茶褐色の世界というイメージですが、私の写真のなかに、豊かな緑のなかで祈りを捧げているのを「発見」して、驚かれる人がいます。衛星写真で見れば、一面茶褐色世界かもしれませんが、地平に立つて見れば、結構、小さな緑が点在していて、たくさんの灌漑施設があり、その周りではいろいろな果物をつくっている。夏の間、グリーンのおごく美味しい葡萄があつて、サクランボやすもも、桑の実、それからメロン、スイカもあります。それを川や灌漑用水のなかに浸して、冷やして、大きな木の下に絨毯を敷いて、家族や親しい人同士でそれを食べるというのが、夏の楽しみの一つだったのです。そういうものは、高いところからは見えない。衛星のようなあまりにも高い視点からは、人々の営みも、緑も、抜け落ちてしまうと思います。

多民族の共生を願ったマスード

私は、一九八三年に、初めてマスードと一〇〇日間生活しました。マスードは父親が造った小さな家に住んでいました。父親は陸軍の高級将校でした。マスードはその家につき最後まで住んでいて、去年やっと自分の家を造り始めたんです。彼は暇をみつけては建築現場に行つて、ああじゃないこうじゃないと、大工さんが嫌がるほど厳格に注文をつけていましたね。そういう点に関しては非常に几帳面で、私としてはマスードが「普通の生活」に気を遣うような時が来たのかな、とうれしく思いました。それまではこの家で生活していました。

ある時、マスードと一緒に隣接するアンダローブという地方に遠征しました。遠征の最後には、もうバテバテの状態で……。なにしろ四八〇〇メートルの山越えというと、酸素が薄くて、頭も痛くなり、足もあがらなくなりますから。私の体力の限界です。彼らはどんどん上に行つて待つていてくれるのですが、私はずーっと下にいて、足を一步、また一步、と懸命にあげて行くしかないという状態でした。後ろの戦士が、私の尻を銃でつついて、「神は偉大なり」と唱えろ。そうすれば力が出てくるから」と言いました。

隣の地域では、ゲリラ同士の抗争で激しい殺し合いに発展していました。マスードはそれをやめさせようとして、そこに乗り込んで行つたわけです。そのときに、山間部から三〇〇人ほどが集まってきた、「マスードと一緒に戦いたい」、そして「凄惨な殺し合いを仲裁してくれたマスードに感謝したい」と言っていました。その人びとに対して、マスードが、イスラムの戦い、いわゆる「聖戦」の意義とは何かを説いていました。

マスードは何度もソ連軍の攻勢を破ることで、国民的な英雄になった。ソ連軍が撤退したのも、彼の地域で敗れたのが大きな原因になっています。彼のところへは、彼の下でゲリラ戦を学びたいという若者が全土から一万人ほど来ました。ムジャヒディンと呼ばれていたイスラム戦士たちに、彼はゲリラ戦術の手ほどきをしていました。

戦士たちは給与で働くのではなくて、ほとんど無給で働いていました。彼らが、スイカを食べていたところへ出くわしたこともありました。私はいつも空腹でしたので、彼らのところに近づいていったらごちそうしてくれましたが、「写真を撮れ」とせかすので、仕方なくシャッターを押す時もありました。今、「仕方なく」と言いましたが、私がアフガニスタンへ行った最初の動機は、「英雄」マスードを撮りに行ったので、他の戦士はあまり撮りたくなかったからなんです。マスードのために、できるだけフィルムを残しておきたかったんですが、みんなが私を見て「撮れ、撮れ！」と言うので、スイカを食べた義理でシャッターを押したんです。それから五年後、彼らにその写真を渡そうとして一所懸命探したんですが、みんな死んだと聞いて、驚きました。自分の村を守ろうとして戦死したんです。

ソ連軍は、マスードに地上戦では勝てないということで、三万人規模の大攻勢をかけてきました。都市部を絨毯爆撃して、その後にソ連軍が入ってきた。あの時スイカを食べていたイスラム戦士たちは自分の村、バザラックという村ですが、それを守るために全員死んだということです。

つまり彼らは、その戦いに向かうところだったのです。私は最初、「なぜこんなに穏やかな表情なんだろう」と疑問でした。私なら緊張してしまうのに違いないのに、と思いました。彼らは、いつ死ぬかわからない。だから、写真に写って、みんなに記憶していて欲しいと思っていたんですね。で



写真1 村人にお茶をご馳走になる (1983年)

すから、あとで、もつと撮ってあげればよかった、と後悔しましたけれども……。

マスードは、当時、一日四時間ぐらいしか眠らないほど多忙でした。なぜ忙しいのかと言うと、戦闘や軍事的な面だけではなくて、政府がないわけですから、行政も彼が担当していたんです。その他に、外国やパキスタンに行きたいという人びとの許可証の発行や、学校や病院の決済、各地から指導者の来訪、時にはスパイをやっている警察署長が来たりして、とにかく忙しかっ

た。その合間を縫って、詩を読んだり、馬に乗ったりして気晴らしをする。彼は乗り物が好きで、馬だけではなくてオートバイも好きでした。

このようにマスードは忙しかったのですが、時に村人が手を挙げて、マスードの車を止めます。写真1は、マスードがお茶を飲んでいかなかったと誘われて、村人と一緒に談笑しているところです。手に持っているのは、イスラムの数珠です。モスリムが、数珠を持っているのは、信仰心のあらわれなのです。

彼には五つくらいのオフィスがあるのですが、そこを移動しています。ソ連軍に狙われて、百万ドルの賞金が掛けられたこともあります。マスードの暗殺隊というのは、今まで十度以上組織されたた

思うのですが、時には対立するヘクマチャール派が暗殺隊を送り込んできました。またその時の政府、ナジブラー政権も彼を暗殺しようとしていた。しかし、彼はいつどこにいるかわからない。彼は、これから行く先を絶対に言いません。車に乗って、初めて「どこそこへ行け」と言って、移動する。ですから、マスードはどこにいるかわからないわけです。しかし、この地では人びとに守られているので、暗殺隊は成功しませんでした。

写真2は、旅先で頭が痛くて、額を押さえているところです。彼は頭痛持ちでした。最近では胃潰瘍も患っていました。しかし当初は、スーパーマンのように思えるほどでした。深夜、みんなと別れてから仕事をしたり、考え事をしたり、作戦を練る。そして、朝一番に起きて、みんなを起こして回って早朝の礼拝に参加させる。そういう姿を見て、最初はすごい人だなと思いましたが、ある晩、外へ行ったら、クヌギの木のとこで声がするので、耳を澄ませたら、どうもマスードがコーランを唱えているらしい。彼が神と対話をしているようで、話しかけることもできませんでした。その姿を見て、彼にも深い悩みがあることを知りました。彼も普通の人間なんだと思いました。彼は、良きイスラム教徒になろうとして、葛藤しながら生きていたのです。

彼は世界各地の歴史の本、革命の本を読んできました。彼が好きだった歴史上の人物は、チムールでした。昔の王でも、人びとのために尽くした人物を評価していました。王と言うと封建制を代

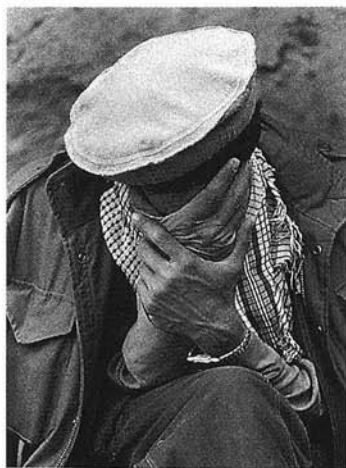


写真2

遊説の旅に疲れたのか、座りにむ
(1983年)

表する存在で、保守的な響きがありますが、王様であっても、人びとを愛する人物がいる。日本の大名でも、飢饉の時に蔵を開いて農民に分け与えた領主がいます。一方、今、民主主義の時代と言われているが、掛け声だけで、非常に閉鎖的な状況が日本のなかに残っている。そう考えると、指導者の人間性は非常に大切だと思います。

写真3は、隣国に逃れた古い友達から手紙がきて、読んでいるところです。花は、他の戦士が、野に咲いているものを摘んで、マスードに差し出しました。手紙と言っても、ゲリラたちが運んでくる、折り疊んだメモなんですが、それを読んで懐かしんでいる。戦いがつらくなると外国へ逃れる人もいます。この手紙もそういう人からのものですが、ただ、マスードは「外国へ行きたい」と言う人に対して、「それはだめだ。ここに踏みとどまって戦え」というようなことはひとことも言いませんでした。「行きたい」と言う人には、いつも許可書を与えていました。本心から言えば、本当は国内に留まって一緒に戦って欲しいけれども、それを無理に止めることはしないのが、マスードでした。

*

一九八八年は、ソ連軍の撤退が決まった年です。私はマスードに、ソ連軍が撤退する時、アフガンへまたやってくるという約束をしていましたので、五年後になってしまいました。行ったわけですが、すると、戦士たちは私のことを非常に怒りまして、「なぜ五年間も来なかったんだ。俺たちはいつもおまえのことを話していたのに、ひどい奴だ」と言われました。

マスードは私のことを非難しませんでした。私は「オマール」と呼ばれていたもので、「オマール来たか」とそれだけ言って、抱き合ったわけですから。

五年前は、死ぬ思いをしたと言うか、山越えに次ぐ山越え、食べ物もない状況でして、苛酷だった

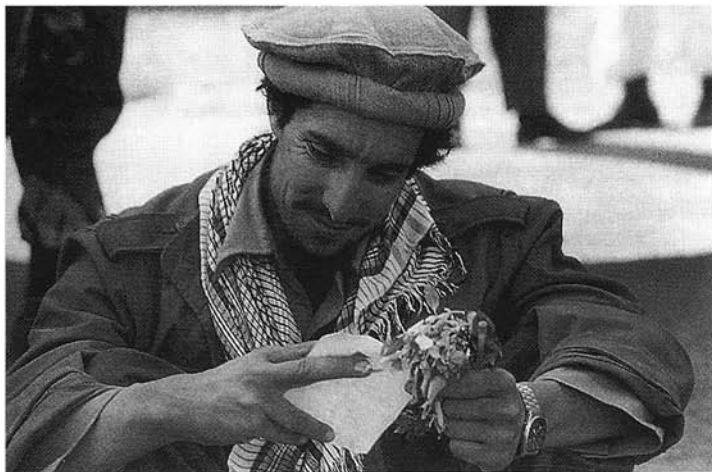


写真3

もらった野の花を手に
手紙を読む
(1983年)

ので、「二度と行きたくない」という気持ちもありました。しかし、マスードが非常にやさしく受け入れてくれて、本当にうれしかった。この時も一〇〇日間、行動を共にしました。他地域のゲリラの戦闘を写すことができました。ただ、マスードは、私に戦闘をしているところへ行けとは言いませんでした。むしろ、止めていたくらいです。

マスードは同じ車に乗りますから、村人はみんな、マスードが乗っていることがわかっていて、村人が手を挙げて、スイカを食べていけと言います。そこは、アンダロプという地方でしたが、水田が広がり、川辺が、すごく美しい光景でした。私がそこで撮った写真があるのですが、イスラム戦士たちは、本当は自分たちが撮りたいのに、「オマールは、景色ばかり撮っている」と言って、ひがんでしまう。そして、「日本にこんな美しい光景があるか」って、私に聞いてくるのです。私は、「日本にもこういった美しい光景はあるよ」と言う。そうすると、「そんなはずはない」と言い返してきます。誰にとつても、自分の故郷が一番美しいんですね。みんな故郷をすごく愛しています。

先日、アフガニスタンに非常に詳しい、パシュトゥーン語とペルシャ語の外国語大学の先生に会った時に聞いた話ですが、アフガン人のことわざに、「その人にとつて、自分の生まれた故郷がカシミールだ」ということばがあるそうです。「カシミール」とは、「理想郷」という意味らしいですね。そのことわざを聞いて、彼らが故郷を愛している気持ちを、また思い出しました。

また村人は、「マスードを招きたい、イスラムのために戦っている英雄マスードを何とか家に招きたい、自分は戦えないから、マスードに何かしたい」という気持ちから、ご馳走を集めてくるのです。そのような日は、村全体でマスードを招くということで、大きな木の下に絨毯を全部集めました。木と枝の間にはコーランが置かれ、きれいな布に包んで置かれます。いろんな集会場や家に、コーランが大切にされて置いてあるのです。人びとは、コーランに一度頭をつけて、口づけをします。コーランに対する敬意ですね。

そうした集いはメマン(客人)の席というのですが、私は、いつもお腹が空いていて、メマンに招かれると喜々としてついていきました(笑)。カバブやヨーグルトなども出ています。果物も出る。一番うれしいのは、ファンタやコーラが出ることです。田舎には全然ないのですが、都市にはアフガン製があるのです。それを買うのはとても贅沢なことなのですが、このような場にはあつて、それが楽しみでした。

時には結婚式に誘われて、喜々として出席しました。おなか为空いていたし、女性はなかなか撮れないので、あわよくば、花嫁の写真を撮りたいと思ったのです。結婚式だから、新郎・新婦が出てくるだろうと思ったのですが、あにはからんや、男ばかりの席に連れて行かれて、「いつ花嫁が来るのか」と聞いたたら、「男と女は別々の席で祝う」と言われて、ガクツとしました(笑)。しかも、期待していたご馳走もなかったのです(笑)。

その後、今から二年くらい前ですが、その新郎に会いました。ついうっかり、「あの時、ご馳走なかったよね」と言ってしまったら、彼がすごく落ち込んでしまったんです。「あの時は、人がたくさん来て、ご馳走が間に合わず、最後は肉なしのパラオ(油ゴハン)になった」って言われて、悪いこ



写真4 装甲車のマスードと戦士たち（1992年）

とを言ったなど、申し訳なく思いました。

*

マスードは、一九九二年、カブールに迫りました。彼は、カブールへ四〇キロのところ、ジャバラサラージにいて、時の政府軍が全部マスードに合流しました。というのも、マスードが政府のなかに、たくさんさんのシンパをつくっていたのです。マスードが勝ちそうだったので、全員が戦車と銃を持って、マスードについたのです。時の副大統領から、マスードに権力を渡したいという話も来ました。マスードだったら大丈夫だろう、安定した政権をつくれるだろうということで、そういう特使がやって来た。マスードがそこでカブールに入って、宣言さえすれば、大統領にもなれた、彼の独裁政権もつくれた状況でした。当時九つのゲリラ組織がありました。マスードは、そのうちの七つから、イスラム政権に加わる合意をとりつけて、ペシャワールにいた各派の代表が大統領を決めるのを待って、カブールに入りました。あとで対立が起きないようにとの配慮でした。パシュトゥーン人のムジャデディ大統領が決まって、その人がカブールに入るのを聞いてから、マスードはカブールに入城しました。

写真4は、装甲車の上で、マスードがカブールを目指している

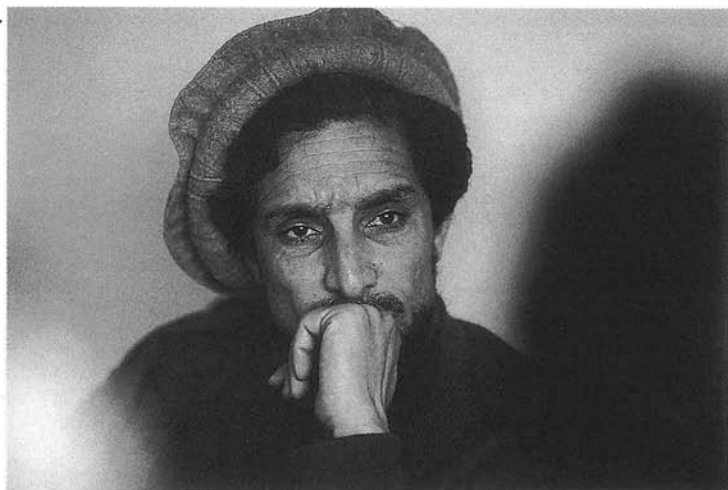


写真5 新たな戦闘の勃発を聞く(1995年)

時の写真です。マスードがカブールに入って、やっと平和が来ると思いました。しかし現実には、パキスタンの支援を受け、マスードにずっと対立してきたヘクマチャール派が、その政権を嫌って、すぐにクーデターを起こして失敗し、郊外に逃れていたのです。ロケット弾十発近くを撃ちこんだため、首都は、瓦礫になりました。ドスタム將軍——今、(北部同盟)に加わっていますが——が、自分が与えられた地位に不満で、反乱を起こします。それをやっと思い出すと、次は、ハザラ族のワハダット派が反乱を起こしました。国防相になったマスードは、次から次へと起こる戦闘に追われる毎日でした。

パキスタンは、ヘクマチャール派では勝てないという判断をして、その後、タリバーンを育てます。一九九四年、タリバーンはカブールに入り、首都に迫った。写真5は、新しい戦いの報告を聞いているマスードの表情です。非常に苦しそうな表情です。

マスードは何とか持ちこたえていたのですが、首都防衛の一翼を担っていたヘクマチャール派の司令官が裏切りをして、首都防衛網の一角が崩れました。マスードは、パシュトゥーン抜きのアフガニスタンは、成り立たない、この国の再建は、パシュトゥーンなしには成しえないと考えていました。だから、彼は、パキスタンがタリバーンへ支援をシフトし、行き場を失った結果、政府に合流してきたヘクマチャールを首相と



写真6 小枝を拾い集める女性（1995年）

して受け入れていたのです。ヘクマチャール派の部下が唯一守っていた地域が、ソルビというところでした。

マスードは、首都カブールが、これ以上破壊されるのは、忍びない。人びとが巻きこまれるのを避けようということで、撤退を決意し、一九九六年九月に、首都から撤退しました。代わってタリバーンの首都が、首都に入城してきました。写真6はその直前、タリバーンの首都が、ロケット弾で無差別攻撃され、電気も水道もないなかで、女性が、煮たきのための枯れ枝を集めているところです。

カブール撤退後のある日、発電機が故障して「真っ暗になった」ので私はあわてたのですが、マスードはあわてず、ポケットからペンライトを取り出して、庶民のために善政を行なったペルシャの王様の歴史書を読んできました。

彼が、窮地のなかでも、なぜ落ち込まないのかを考えると、彼が普段言っていたことばが思い返されるのです。「神は、自分が懸命に生きているとすれば、喜んでくれる」。「神が自分の死を決める。自分が死ぬとき、それは神の意志だ。ただ、それがいつ来るかわからないから、それまでを燃焼させるように生きたい」という言葉でした。

私は、マスードが戦いに勝てばいいと思っていたのですが、マスードにとっては、勝つことが大事ではない、もちろん負けるよりはいいのだけ

ども、勝てないからといって、神が自分を見捨てるわけではない。懸命に生きる姿を、神はしっかりと見ていてくれる。よしんば負けて、失敗しても、彼にとつて、それは悔いすることではない。だからマスードは、世間の評価とか世界の評価、状況が悪化しても落ち込まないのだ、と私は思いました。

一九九七年、マスメディアは、撤退したマスード派はタリバーンの前に風前の灯だと伝えていた。たので、マスードはとても落ち込んでいると想像して、私はパンシールに行きました。「タリバーンが、全国制覇する。マスードはもう終わりだ」と言われていましたので、何とか励まさないやという気持ちで行ったのですが、マスードは、全然落ち込んでいませんでした。笑顔が昔のままでした。

マスードは、「二九七八年に、二八人の仲間と立ち上がった時には、五丁の武器しかなかった。その時を思えば、まだまだ今のほうが楽だよ」と笑って言うのです。

今、パキスタンとイランは、アフガンからのたくさん難民に国境を閉めています。外にも出られないから、タジク人やハザラの人たちは、アフガンの北部や西部へと逃れています。マスードのところにも、一九九九年ですが、二〇万人の人たちがやってきました。というのも、タリバーンが、マスード派の地域を制圧して、家を焼いて、畑を焼いて、男たちを連れ去っていったからです。パニックになって、マスードのほうに逃げてくるのです。「日本はいつたい何を援助しているんだ。俺たちのところは、家を焼かれ、家族もばらばらになって、すべてを失ってしまった。残っているのは、神への信仰だけだ」と言っていました。マスードも、その人たちを助ける余裕は、あまりありませんでした。ですから、地域の住人が助けていたわけです。食べ物や渡して、毛布を貸したのは、地域の住民でした。イスラムでは、困った人を助ける美德があります。

難民を収容するために学校が閉鎖され、やっと授業ができるようになって、子どもたちが教科書代

わりの、コーランを持って、蠅爽と学校に行きます。その中には、地雷で片足を失った若者もいます。

中国の新疆ウイグルから、タリバーン義勇軍がやって来ました。彼らは、マスードと戦った後、捕まったわけです。マスードは、「敵をできるだけ殺さずに捕まえる」というコーランの教えを実践していました。元のタリバーン兵士もいますし、アラブ人、パキスタン人、中国人もいます。

彼らにインタビューをすると、率直には答えませんが、「マスードたちはイスラムじゃない、と聞かされて、自分たちは悪い人をやつつけるためにここに来た」、と言う。だけど、「マスード」とは、イスラムの名前で「運のいい人」という意味です。そんなことを、彼らもわからないはずはないと思うのですが、彼らはそう言っていました。

タリバーンは、同じイスラム教徒に、ジハードを宣言する矛盾もあって、初期のころは、お金で雇われてきた人がとても多いのです。パキスタンの人などは、仕事があるから行かないかと言われて、ここに来たら銃を持たされたと言っていました。ただ、近年は、非常にラディカルな原理主義の人たちが加わるようになりました。

一九九八年、マスードは、ほとんど負け戦に近い状況になって、周りを全部タリバーンに囲まれていた。タリバーンは、マスードの物資補給の後方基地タラカーンを奪取し、補給も途絶え、外部とのルートが断たれ、パンシールに孤立した。マスードは、ひとりになっても戦うという気持ちでいたけれども、住民代表を中心とした評議会・シュウラに臨んだら、みんなも戦うと言ってくれたそうです。

負け戦のなかで、マスード派からタリバーンに寝返る人もたくさんいました。給料もない、食べるものもない、という状況のなかで、戦車から油を抜き取ったり、住民から奪ったものを自分のものにする人もいました。マスードは、そんな人を殴りつけたり、武器のむだ撃ちをするような兵士を営倉

に入れてしまったり、昔と変わらず、潔癖でしたね。

マスードのところには、一年前、ボロボロの輸送用ヘリが五機ありましたが、それは昔と変わらないう数です。マスードのところへは峠を越えなければ行けないので、四千メートルまで上がれるヘリがなければ行けないのですが、そこまで行けるのは二機だけでした。僕は財務官に、「ロシアが援助しているのなら、ヘリがなぜ来ないの」と尋ねたら、「ロシアは、一機三億円だと言うんだ」という答えが返ってきました。マスードが、二〇〇〇年八月に、拠点タラカーンを失った時になって、ロシアはやっとヘリを供与したらしいです。それまでは何年間も、満足にヘリがない状況でした。

ロシアは、マスードに、イスラム原理主義を防ぐ盾となることを望んでいる。しかし、マスードが首都をとれるような、あるいは決定的な主導権を握るような援助というのは、いっさいしていない。周辺国にとっては、アフガンが強力なリーダーのもと統一されるのは、困ることなのです。弱い政府であつたほうが、自分たちの影響力が及ぶわけです。ただ、負けてゼロになれば、盾の役割を果たさないで、何とか凌げるくらいの援助をするというのが、ロシアなどの考え方だと思います。

ロシアは、マスードがいなくなつて、反タリバーン連合が負けたら困るから、援助をまたバーツとやるわけです。ただマスードがいるときには、そういうことはしなかったということです。

一九九〇年にマスードにインタビューをした時の写真が、会場の皆さんに先ほどお見せしたビデオ（一九九二年七月二日放送、NHK教育テレビスペシャル「革命家マスードの闘い——写真家 長倉洋海のアフガン報告」）のなかにあります。その時、マスードが僕に言ったのは、いつか国を解放したら、大学に戻つて勉強したいということでした。一九八三年のインタビューでも同じことを言っていましたので、将来の夢は変わっていませんでした。ただ今回ビデオを見直して気づいたのですが、「そ

れまで生きていられたら、だけどね……」と、言っている。マスードは暗殺に倒れたわけですが、いつか倒れる時があるかもしれないという予感があったのかもしれませんが。

去年マスードと別れた時、タラカーン攻防戦の最中でも、マスードは司令官に対して、笑顔を向けていました。彼の笑顔は透明というか、欲がないように見えます。(北部同盟)のそれぞれの指導者たちはみんな、それぞれの野心が強いですが、マスードには欲がない。だからマスードとは協調できるのだと思います。

マスードは、いろいろな違いを持っている人を何とか寄せ集めて、反タリバーン連合を結成した。(北部同盟)という言い方は、マスコミがつくったことです。正式には、「救国イスラム統一戦線」で、彼らは、United Frontと言っています。そこには、マスコミが報じるような、少数民族だけではなく、パシュトゥーンの二つのグループも入っています。ハジ・カデルとカブル北方のサヤフという二つのグループがあります。ただ数は少ない。

「統一戦線」ですから、マスードは、これらの利害も思いも違う民族とともに、反タリバーンということで戦おうとした。マスードが指揮していたから、なんとかまとめることができた。しかしタリバーンとしては、あるいはオサマ・ビンラディンとしては、マスードがいるかぎり全国制覇ができない。タリバーンは、いつかアメリカとぶつかる時に、国内の二つの勢力の一つではなく、アフガンを完璧に統治した政権として、アメリカとぶつかれば、世界にその非道を訴えることができると考えて、マスードを殺すために、自爆テロをやったのだと思います。

マスードは、今年四月、(欧州議会)に招かれて、各国指導者から、好感のうちに迎えられました。支援も始まるどころでした。タリバーンは逆に、仏陀を破壊したり、国内での女性弾圧もどんどん明

らかに、国際的に孤立していった。そういうなかで、政治的な風が吹いてきたマスードを排除したいという思いが、タリバーンにあったと思います。(ここでスライド終了)

自分の国を愛し、選挙で政府を選ぼうとしたマスード

アフガニスタンが、多民族国家であることは確かですが、人口も、民族構成も、今だに明確ではないのが現実です。よく日本のマスコミが、「アフガン人はタリバーンを支持しているのでしょうか」と聞いてきますが、アフガン国民のコンセンサスを測る機会は、戦争のために、これまでありませんでした。

ただ、マスードは、これまでタリバーンに対して、「あなた方が、最も人口が多いとされているパシュトゥーン人から構成されていて、しかも国民の支持を得ていると言うのなら、選挙をしよう。選挙をして、あなたたちが勝てば、私はそれに従う」と言ってきました。彼らは、昔のモハメッドが生きていた時代の共同体を理想としています。そこに戻るといのが、タリバーンのような過激なイスラム原理主義者の意見です。

今日みなさんに知っていただきたいのは、今マスコミで、アフガンの過激派ばかりが取り上げられていますが、いろいろな民族がいるのがアフガニスタンです。自分の国の独立は守りたい、そしてそれが守られれば、いかなる国の人とも仲良くしたいと考えるイスラムの人はたくさんいるということです。世界と対立するのではない、と考えている人が圧倒的多数派です。

ビンラディンのように、アメリカを敵とすることは、ある意味ではアピール力があります。アラブ

の若者がジーパンをはいて、酒を飲むことは、タリバーンには「墮落」だと言われます。それは、アメリカ文化の影響だから、アメリカが悪いんだと言ってしまうと、では、ジーパンをはいてお酒を飲んでゐる人たちの意識はどうなるんだろう。サウジアラビアにアメリカ軍がいるから悪いのなら、それを受け入れたサウジアラビアの政府はどうなるのだろう。

マスードは、いつも自分の国をどうかしたいと考えていました。自分の足元を見つめずに、外に敵をつくつて、そこに向かっていくのは、ある意味では楽なことですね。アビール力もあります。しかし、自分のところも本当に変えて、内戦を一刻も早く治めなくてはいけないというのが、マスードの考えでした。マスードは故郷を持っていた。その故郷を愛していて、地域の人たちを、できるだけ戦闘に巻き込まないようにしていました。ビンラディンはサウジアラビアの生まれですが、彼には愛する故郷が見えないような気がします。だから、革命のために、アフガンの人たちを踏み台にできるのではないのでしょうか。

二、三年で交替する特派員には 真実は見えない

日本の新聞社は、タリバーンがカブールを制圧してからも、特派員を出しているのです。そのレポートの多くは、「タリバーンがカブールをとって、この国の治安は良くなった」というものでした。しかし、僕から見れば、「カブールが平穏だったのは、マスード派が近くにいても、ロケット弾を打ち込まなかったから平穏だった」とも言えるのです。そのことは書かず、「タリバーンになって平和だ」と書く。物事は、両面見ていなくてはいけないと思います。特派員は、二、三年で代わります。

今アフガニスタンを担当している人は、二、三年前には担当していなかった。つまり、混乱していたと言われる内戦自体を見ていないのです。ヘクマチャール派やタリバーンが、どれだけ市内にロケット弾を撃ちこんだかを知らないのです。

マスードは私に、「私たちにも責任があつた。いくつかのグループが通行料を払つたり、ヘクマチャール派の司令官が私に伝えた話では、パキスタンの軍部がタリバーンにお金を出して、アフガニスタンの国内を撓乱するように頼んでいた」ということでした。

パキスタンはずっと、支配民族だったパシュトゥーンのヘクマチャール派を支援して、自分たちの思い通りの政権をアフガンにつくろうとしていた。ただ、カブールに入ったのは、自分たちが無視していたマスードであつた。それでパキスタンは非常にあわてたと言われています。だから、マスードの加わっている政権を何とか揺るがそうとしていたということなのです。今、パキスタンは、「北部同盟」が入ると、また殺戮がある」という言い方をしています。自分たちが陰で自分たちの思いのままになる派を支援し、カブールを破壊していながらです。ヘクマチャールで失敗し、タリバーンは崩壊しようとしているので、自分のカードがなくなると、あわてているのです。これまで冷たくしてきた「北部同盟」がタリバーンに勝てば、自分たちに敵対するだろう、と見ていますから、「北部同盟」は、インドが支援していると云つて、今度は、タリバーンの穏健派をつくり上げ、政権に参加させようとしているようです。これは、明らかな内政干渉なのに、日本のメディアはそのことに触れようとしません。

マスードは、「世界が、アフガニスタンへのパキスタンの介入さえやめさせてくれたら、自分たちは独力で、タリバーンを追い出してみせる」と言っていました。マスードは、日本のウズベキスタン

の大使に、何度も会っています。その場に私がいたわけではありませんが、きっとマスードは、パキスタンの介入をやめさせるよう、語っていたと思います。欧州評議会でも、マスードは、パキスタンが介入して、タリバーンを支援しているから、戦いが終わらないことを力説し、日本にもそのための協力を期待していました。

これまで世界は、アフガニスタンに目を向けてこなかった。もつと世界が早く目を向けていれば、ニューヨークの事故もなかったかもしれません。タリバーンにオサマ・ビンラディンのグループが入って、テロの訓練や国内で民族浄化のような虐殺をやっていたことを、アメリカも日本も国連も知っていたはずで、それなのに、「これは内戦だから、双方武器を置けば、私たちは経済援助をします」という言い方を、日本もし続けてきたのです。しかし、これは単なる内戦ではなく、パキスタンが圧倒的にタリバーンを支援していて、外国の人たちが四〇五割もタリバーンに加わっているのです。マスードは、「タリバーンはパキスタンの傀儡だ。アフガンの独立のために自分は戦う。ただそれだけだ」と言っていました。

時間をかけて「真の平和」を求め続けたマスード

このように話していると、長倉は、マスードの広報部員ではないかと思われる人もいるでしょう。でも、僕はマスードが好きです。マスードと一緒にいた時、百メートルも離れていないところに、rocket弾が飛んできたことがあります。僕は、自分が当たらなくてよかったと思ったのです。しかし、マスードは、「そこに人がいたか」とすぐ聞きました。このことによく現れているのですが、まっさ

きに人のことを考えるというのは、なかなかできないことだと思えます。

多くの革命家の考えは、「将来この国がよくなるから、今は犠牲は仕方がない」というものです。自分たちの理想のためには、他人を巻き込んでもしようがないと考えます。ニューヨークの事故などは、その典型だと思うのですが、無実の人を巻き込んで、自分たちの主義をまっとうしようとする。それは外にだけ向けていたわけではなく、アフガニスタンのなかでも、タリバーンあるいはオサマ・ビンラディンは、たくさんの人を犠牲にして、殺してきた。タジク人などの他民族だけでなく、同民族のバシュトウーン人もたくさん殺している。

マスードのやり方は、それと対極にあります。アフガンにはたくさん民族がいるから、それぞれが和解し合わない、一時的に権力をとつても、誰かが反対すれば、戦いがおきて、人びとの願う再建もできない。だから、人びとの同意を得ようと、時間をかけてものごとをやっていきます。僕から見ても、やきもきすることもたくさんあります。周りの人と、マスードの話をすると、本当に野心がないよね、という話になります。野心があれば、カブールを制圧したり、タリバーンの一部と組んでクーデターもできるのに（一九九九年に反オマル派のタリバーンから、クーデターの申し込みがあった）、そうはしない。ただ僕は、マスードのそういう生き方がすごく好きです。戦争で、狂気に染まる指導者もいますし、人のことを考える指導者もたくさんいますね。しかし、アフガニスタンの未来、そして、そこに生きる人々を見据え続けていたマスードというのは、僕のなかでは、いまだにすごく輝いています。

マスードが私のことを、ジャーナリストとかカメラマンとしてだけ見ていたのではなかったことが、嬉しいですね。友達として、つきあってくれたのです。「もう写真はいいじゃないか。ここで一緒に

お茶を飲め」とか。でも、僕を特別待遇して、「お前ここに座ってこれを撮ったらいい」などと言ったことは、ひとこともなかったです。それは、周りの戦士たちと同じ扱いでした。ただ、僕がいつもマスードの近くで撮れたのは、周りの戦士たちが、けんかもよくしましたけれど、僕のことをよく慕ってくれて、僕を押し出してくれたからです。みんなと仲良くできる私を見て、マスードも「特別扱いはしなくていい」と安心して僕を側においてくれたと思うのです。

昨年は地雷原で遅れがちな私に、「ここには地雷があるんだぞ。日本に帰れなくなってもいいのか」と怒られました。マスードは死んで、たくさんの方が悲しんだと思います。十六日のバンシルでの葬儀にも、私はいけませんでしたが、十二歳の息子アハマッドが、挨拶をしたそうです。「自分の父親は、いつも神のために死ぬことを願っていた。それを、ある意味では実現した。ただ時期が早すぎた」と。

今、マスードがいれば、アメリカの介入を排して、時間がかかっても、人を巻き込まずに、自分たちの力だけでタリバーンと対峙しよう、と考えていたと思います。

マスードの葬儀を、私は映像でしか見ていないのですが、本当にたくさんの方が集まって、みんな大声で泣いていました。それは、やつぱり、彼が今生きていれば、という気持ちが強いからでしょう。タリバーンあるいはオサマ・ビンラディンが、それを見越して、マスードを除外していたというのが、とても悔しいです。日本は、アメリカの意向に従ってマスードたちの政権を認知しませんでした、マスードたちがカブールに入った時、あの政権を認知していたら、それ以降のパキスタンの介入は、完全な内政干渉となったわけで、国連の場で糾弾されただろうと思います。

アフガニスタンの独立を願いつづけたマスード

マスードが死んだことは、本当にショックで、何日間も泣いて、最近ようやく泣かずに話せるようになったのですが、追悼集会などをやると、まだ涙が出ます。

僕に何ができるか、と考えます。マスードのことは、アフガニスタン国民全部にも、まだ知られていない。だから、彼のことを伝えていこうと思います。

しかし、もしアメリカ同時多発テロがなければ、タリバーンがこの国を支配しようが、どれだけ人びとを弾圧しようが、前と同じように、無視したと思います。それは私にとっても最悪のシナリオでしたが、米国でのテロで世界がアフガンを見ようとしています。

日本の識者のなかには、今回のテロは、アメリカがパレスチナでやってきた不正義の報いだというような言い方をした人もいます。でも、それはちよつと違うんじゃないかと思います。僕がマスードの死を悲しむように、ニューヨークでテロリズムにあった人たちの遺族や友人たちも、同じように、いや、それ以上に、悲しんでいるはずです。

アメリカの国民が、報復したいという気持ちもわかります。しかし、それでアフガンに、また米国のように悲しむ人が生まれると思います。だからこそ、立ち止まって欲しいのです。そして、その前にもタリバーンに虐殺されて、弾圧されて、ニューヨークと同じように、涙を流した人がいるということ、アメリカは知るべきです。だから、自分だけの論理で動くのではなくて、どうしたらテロリズムを解決できるのかということを、自分たちが決めるのではなくて、アフガンの人と相談して決めるべきだと思います。アフガン人の声を用意できる状況にまだないなら、まず声を反映させることの

できる基盤を、時間がかかっても、世界の国ぐにと協力してつくることしかないと思います。

僕ができることは、間近に見て来たマスードの平和や独立への想いを、日本だけでなく、世界に伝えることです。平和になったときにはアフガニスタンでも写真展を行なったり、写真集を出して、伝えていきたいと思います。周りの人びとを愛し、世界の異なる人びとも一緒に生きようとしたマスードの気持ちを、ひとりでも多くの人に知って欲しいと思っています。

現場の人に「心を寄せる」ことが「反戦」

最後に、「反戦」という問題についてひとこと述べさせていただきます。

先ほども少し言いかけたのですが、マスードが語っていた「世界と対立するのではなく、まず、足もとから変えていく」ということは、すごく大切なことだと思えます。オサマ・ビンラディンがやろうとしていることは、——これは彼がやっていると仮定してのことですが——世界に敵をつくって、果てしない戦争と憎悪を生んでいく。その戦略は、イスラム世界と非イスラム世界を対立に持ち込むことです。しかし、すべてのイスラムの人が、彼らを支持しているのではなく、マスードのように考える人も大勢いるのです。それは、「世界のひとと一緒に生きていきたい」と考える人たちです。

僕がマスードから学んだことはたくさんありますが、民族や出生にこだわらず、人間をまつすぐに見るということです。僕は非イスラムなのに、受け入れてもらった。元ソ連兵でも、信頼すれば、彼の数少ない護衛役に任命しました。彼の家の裏には、お父さんから遺されたりんご園があります。それを守っているのは、パシュトゥーン人の家族です。

日本のマスメディアは、タジクとパシュトゥーンとが民族抗争をしていると書いていました。けれども、民族抗争をしているはずの民族が、マスードのすぐ裏にいて、仲良く生活をしているのです。オサマ・ビンラディンのように対立を助長し憎悪をエスカレートさせる行動は、世界を破壊に導くと思います。ただ、そのように追い込んでしまった世界にも問題があります。彼は突然変異で生まれたわけではないのです。世界の矛盾、自国の体制にいきどおりを覚える人たちが、ある意味で、アフガニスタンに押し寄せて来た。オサマ・ビンラディンの、アメリカを敵とするという激しいプロパガンダに魅かれて、その人たちはやってきた。だけど、それに最初に苦しんだのは、アフガンの人たちです。今、ビンラディンの顔写真を持って、英雄と崇める人たちに、アフガンの人たちが、いかに苦しんだかを見せることができれば、彼らはきつと変わると思います。パレスチナには、親ビンラディンが多いと伝えられますが、あるパレスチナの新聞が「あなたは、ビンラディンやタリバーンのもとで暮らせるのか」と、問いかけたと聞きました。

アフガン問題を評論する人びとの多くは、自分だったらどうだろう、と考えてほしい。それが、人びとに心を寄せるということなのではないでしょうか。

僕も、彼らに心を寄せようとしても、もちろん、一〇〇％彼らになりきれないわけではありません。自分の家が壊され、家族も殺されていないのですから。それでも、気持ちをおしはかることで、少しでも、近づくことはできると思うのです。

今の日本のマスメディアの報道は、あまりにもそこに生きる人に心を寄せない情報であったり、単に日本国家としてどうしたらいいか、そして国益は、といったことはかりに終始している。「そこに生きている人の声を聞く」ということが、スッポリ抜け落ちているようです。

私はマスードが大好きです。でも彼が絶対だとは思っていません。それを決めるのはアフガンの国民です。だから彼も、いつも選挙をして、この国の未来を決めるべきだと話していました。

一番苦しんでいる人びとの真実を知ってこそ「反戦」の力が生まれる

僕は、「反戦」はすごく大切だと思います。ただ、今「反戦」を叫ぶ人には、あえて残酷な言い方をしますが、アフガンが今まで世界から見捨てられて、おびたらしい難民が出て、殺戮されていたことを知らなかったことを、反省とは言いませんが、しっかり認識してほしい。今、反戦を叫んで、アメリカが爆撃をするから反対。そして、アメリカが爆撃をやめたら、またアフガンのことを忘れてしまうとしたら、これまで日本国家やアメリカ国家がやってきたことと、ある意味においてですが、非常にエゴイステイックという意味で、同じレヴェルになってしまうと思います。戦いを一番やめたいと思っているのは、彼ら自身です。だけど、戦わざるを得なかった理由もあります。それなのに、戦いが続くのはなぜなのか、ということ、僕なりに考えてきましたし、少しでも伝えようとしてきました。そのことを考えないと、本当の反戦にはならないと、僕は考えます。

マスードは、私の合わせ鏡でもありました。マスードといふことで、自分のいたらなさや傲慢なところとか、いろいろなことが見えてきたし、できれば、ずっと先生のようにいて欲しかった。

今までは、マスードと顔を合わせない時もありましたから、ちょっと安直に生きてもいいかなという気もしていましたが（笑）、彼がすごく高いところのぼっちゃったので、いつでも彼が私を見ているようで、日本でもちよっと手が抜けない、という思いでいます。

今、僕の人生のなかでも、今までに無かったような、とても忙しい時期です。来年は写真展を考え
ていますし、写真集もまた出しますし、文章も書くこうと思っています。絶版だった『マスードの戦い』
と『マスード 愛しの大地アフガン』も復刊されることになりました。ジャーナリストとして、本当
はうれしいはずなのですが、それよりも、やらなければという気持ちが強いです。

今日は、ありがとうございました。

*

司会 実は、今日の集会は、「マスードが殺された」という新聞記事を見て、「あつ、長倉さん！」と
心配になって、「一緒にマスードのために祈りたい」と、長倉さん呼びかけたのです。

長倉さんとは、一九九一年の湾岸戦争直後、あの報道があまりにも納得できないと、PARCの市
民調査団に加わって以来のおつきあいですが、今、お話を聞きながら、改めて長倉さんのやさしさが
胸に迫りました。「命を投げうって、平和を、祖国を愛し続けたマスード」のために、一分間、黙と
うを捧げたいと思います。

【質疑応答から】

◆アフガニスタンのことは、今回の事件があるまで、地雷や飢饉、かんばつのこととして頭にあつたので
すが、紛争ということで考えたことがありませんでした。今日長倉さんのお話を聞いて、本当に初めての
ことばかりを知らされて、反省もしました。私のような者に、また世界の人へ、長倉さんが知っていらいっ
しゃる情報を、さまざまな機会を通じて発信するお考えはありますか？

僕が、大新聞に毎回ページを持つていれば別だけれども、僕が何かやったとしても、小さなホームページくらいしかなくて、僕のこと知らない、また（あごろ）のことも知らない人と、僕が会おう接点は、きつと非常に少ないでしょうね。ただ僕が、テレビに出演して話した場合、その人がそれを見ていて、例えば、今インターネットがかなり普及している時代ですから、「長倉洋海」をそこで探すようなことをすれば、情報を得ることができるよう。情報が異常に氾濫しているから、自分が感じたことに深く入り込んでいく、あるいは自分の判断の軸をさがす努力を多少しないと、そのなかに埋もれてしまうように思います。

世界に情報を発信したい気持ちはあるけれども、僕がまずやるべきことは、この日本に、情報をしっかりと伝えて、それがまた何かの形で、外国で形になったりすれば、それはそれでいいと思う。今度は、ペルシャ語も含めた写真集を出したいとは思っています。

◆いちジャーナリストとしてお聞きしたいのですが、偽ジャーナリストが、マスード取材する許可が、どのような形で下りたのでしょうか？

マスードのところには、世界中から、それこそいろいろな取材人が押しかけていました。チェックが厳しくなかったですね。だから、「あいつはCIAだよ」と、戦士が言っているような人も記者として来ていました。ただ、今回に関しては、通信社のレターを持ってきて、形式としても非常にしっかりしていたようです。フランス語に堪能で、ジールパンを履いていて、とてもイスラム原理主義者には見えないように装っていたし……。その意味では、ジャーナリストに化けたのは、世界に声を伝え

ようとしたマスードの弱点を突いたと思います。

マスードも、やって来る人を、そんなに厳密に調べることをしていませんでした。マスードは、死ぬ時は、どんなことをしても止められないという考えがあったようです。僕としては、少し心配でした。爆弾にしても、仕掛けられていても不思議はないようなこともありました。でも、マスードは、地域の人を信じていたし、また同様に、地域の人にはマスードを守ろうとしていたから、単なるテロリスト、あるいは殺人者としては、この地域には入れなかったと思います。だから、暗殺者が、マスードがジャーナリズムには甘いことを見越して、マスードに近づいたことは、非常に悔しいです。

さつきも言いましたが、マスードは地域の人を信じて、周りの人を疑わなかったということは、非常に正直というか、まっすぐに生きたと、僕は思います。

◆マスードは、どういう結婚をしたのですか？ お見合い結婚なんですか？ このような時にしか聞くことができませんから（笑）、教えて下さいますか。

彼のボディガード兼秘書をやっていたトウジュディンという年配の人がいて、彼の娘と結婚したのですね。突然の結婚だったのです。マスードは、昔は、戦いが終わるまで結婚しない、と言っていましたので、僕もどうしてかなあと思ったのですが、きつと聞くと照れるでしょうから、はっきり聞いたわけではないのですが……（笑）。

当時のラバニ大統領はマスードの大学の教授でした。そのラバニ氏は、自分の娘をマスードに嫁がせたかったようです。それで、マスードは、それを断りたかったようですが、断ると、失礼な状況に

なってしまう。マスードは、ラバニ大統領の娘と結婚すれば、政略結婚になると思っています。

自分のすぐ側にいたトウジュディンの娘というのは、子どもの頃から何度か見ていて、その人を気に入っていたから、あわてて結婚したのだと思う。事情でせかされたように（笑）。でも決まっていたので結婚したわけではないと思います。結局、ラバニ氏の娘は、マスードの弟、ジャーと結婚したんです。

さつき、マスードが子どもを抱いて歩いていた写真があつたけれど、あれは全部トウジュディンとの子どもです。マスードの奥さんの目はグリーンで、子どもたちはみな端正な顔立ちをしています。奥さんの顔を僕は見たことはないけれど、多分きれいな人だと思う。性格は、彼女の兄弟を見ていて、結構強いかなと思う（笑）。奥さんは表では、チャドル姿でいるから、見られないのです。でも何度かすれ違っているんです。僕の写真集も、全部見ていてくれているようです。僕がマスードを、ずっと撮っていることを知っていて、何となく僕のことを、気にかけてはいたようです。お土産を買ったこともあります。

昨年、北部の大部族アイモックのリーダーの息子に会った時、彼が僕に、「あなたはマスードを愛しているだろう」と言ったので、面食らっちゃって、「愛してない、愛してない。好きなことは好きだけど」と答えました。彼は、「写真を見れば、あなたがマスードのことを愛しているのが分かる」と言うので、その意味だったら「そうかも知れない」と話したんです。その彼にこの間電話をしたら、マスードの死を、すごく悲しんでいました。たくさん悲しんだ人がいますね。家族が一番悲しんでいるでしょうし。そういう人たちは、自分のできる範囲で、マスードを忘れないようなことをしていくしかないな、と思っています。

◆ニコライさんは元気ですか？ カリルはどうしてますか？

元ロシア兵のニコライは、イスラマディンというイスラム名になりました。体はきやしゃなんだけど、マスードのボディーガードになりました。彼のロシアの奥さんは、ニコライが戦死したという公報を受けとり、再婚してしまっていたんです。だからニコライは、アフガン人と再婚しましたが、その女性が病気になったので、治療のためにロシアに帰ったんです。このあいだ、お金がなくて、マスードのところにお金を借りに來ていましたね。マスードも貸したらいいですが、どっちも人が好いというか、ロシアからお金をわざわざ借りにくるというのは、すごいですね（笑）。ニコライは、アフガンの帰還兵の組織で働いていると聞きました。このエピソード一つとっても、マスードと周りの人びととの関係が見えてくると思います。

ニコライは、線も細くて、決して勇猛でもありません。マスードのボディーガードは、やっぱり強い奴で、しかもパンシール出身が望ましいと周りの戦士は思っていて、陰口を言う人もありました。マスードは、ぜんぜん気にしないのです。僕は、マスードが熱意を感じて受け入れてくれた、と思っていたけれども、ずっと見続けていてわかったのは、マスードが、どんな人に対しても心が広いということでした。それが、彼の魅力です。

詩人戦士のカリル・ラハマンですね。カリルは、今、サウジアラビアで先生をしていますよ。この間会って、アフガンの本を書くと言っていましたよ。

◆オサマ・ビンラディンは、私の直感ですが、近代主義者なのじゃないのかなと思っていますが、ど

うでしょう。彼が言っているのはイスラム原理主義で、モハメッドの時代に戻れと言いながら、信念は、近代主義に根差しているのではないですか？

僕に言わせれば、近代主義という以前に、破壊主義者です。世界に敵をつくって、対立しかないと
いうように煽るのは、悲しいことだと思いませんか？

近代主義者かどうかは、僕はわかりませんが。ただビンラディンは、マスードに対して嫉妬があつたような気がします。というのも、マスードが、多くの人に守られて愛されて生きていたのに対して、ビンラディンやオマール師は、周りの人を誰も信用できないように見えるからです。ただ、高い目標を掲げ、アメリカ世界を敵に回して、自分のなかでの複雑な思いを、そこにぶつけていくというような生き方をしています。周りの人と一緒に生きようとするよりは、敵をつくり出して攻撃していくところがあるように思えます。

ビンラディンは、パキスタンのラインにつながつて、ヘクマチャールやサヤフの下で戦いをしたんです。アフガンへは、祖国でたくさん基金を集め寄つたアラブの義勇兵が来たけれど、マスードは彼らと一緒に戦わせませんでした。他のグループは、彼らが望むように、戦いをさせてあげたんです。マスードが、彼らに戦わせない理由は、「これは自分たちの戦い」だからです。

昔、マスードが原理主義者だと言われていた頃、僕は「アフガンを解放したら、レバノンに義勇軍を出しますか」と質問したのですが、マスードは「出さない」と答えました。「アフガンの再建が第一だ」という理由です。

このあいだも、タジクの原理主義者のグループが、マスードのところに、客人としていたんですが、

客人として滞在するのは、マスードは断らないですね。けれども、彼らが国内でハイジャックをやつて、大臣と乗客を人質にとつて、政治犯の要求をしました。そのグループに対して、マスードは、「それはテロリストのやることだ」と直接に厳しく批判していましたが、彼らも言うことを聞かずに、マスードのところを出ていってしまいました。先ほども言いましたが、マスードは多くの人を巻き込んだりするのではなく、イスラムの本来の良い精神を、自分のなかに握みとろうとしていたと思います。

人間には、資質というものが 있습니다。マスードは、一九七五年には、革命の蜂起に失敗して、山をさ迷つて、パキスタンへ逃げたのです。その時に、誰も支持してくれない。食べ物もない。寝るところもない。だから、人々の支持のない革命は失敗するということを、身をもつて学んだと言います。一方、ヘクマチャールも、失敗をしたはずなんです、彼が人びとの存在を学んだかと言えば、学んでいないと思います。同じ体験をしても、体験から学ぶような資質を培ってきた人と、そのような資質を持たない人がいるのではないでしょうか。

◆マスコミでは、アフガニスタンに、民族間の確執があることが強調されていたように思うのですが、旧ソ連と敵対していた後、クーデターが起きましたよね。民族間の権力争いの側面が強かったんですか？

それはヘクマチャールのクーデターですね。彼は昔から、大学の後輩でもあるマスードに対して対抗意識が強く、暗殺を仕掛けたこともあります。彼が、バシュトゥーン出身だから、バシュトゥーン全部に支持されているかという、そうではありません。バシュトゥーンは千以上の部族からなると言われています。マスコミは、それをひとまとめにバシュトゥーンと言いますが、バシュトゥーン

としてまとまった意見があるのかと言えば、ないのです。ただ、ヘクマチャール氏は、今もマスードの後を狙おうとして、野心満々ですが、大きな支持を得ていないと思います。彼はタリバーンにも、原理主義という面では近いので、パキスタンからまた支援を得たいと考えているようです。マスードが死んだ時も、ヘクマチャールが、見てきたわけでもないのに、「マスードは間違いなく死んだ」と断言していたことは、とても悔しかったです。

民族抗争ということでは、パシュトゥーン人がこの国の中枢を支配してきたなかで、最下層に常にな置かれてきたのは、モンゴル系のハザラ族です。彼らは、パシュトゥーンにずっと差別されて、最下層の仕事させざるを得なかった。だから、彼らハザラ族には、ソ連軍と懸命に戦って、成果を上げれば、パシュトゥーンを見返せるという気持ちが非常にあったと思います。マスードがいたイスラム暫定政権でも、一番もめたのは、パシュトゥーンとハザラ族との問題です。マスードはその抗争を、何とか調停しようとしていました。

◆マスードは、アフガニスタンを統一する明確な意識を持った指導者だったということでしょうか。

マスードを、近代主義者というのが適当かどうか分かりませんが、良いものを取り入れていくし、国を発展させたい、イスラムの精神が省みられない状況を何とか変えたい、と考えていたのだと思います。その意味で、部族意識を強調するよりも、アフガン人としてまとまる必要を述べていました。それが対ソ戦を経て、それ以後、何々部族の誰々という言い方ではなく、アフガン人の誰々というふうになってきました。マスードは、王制には批判的で、その時代にアフガニスタンが一番遅れたと考

えていました。しかし、国家再建に必要ななら、受け入れてもいいと言っていました。

マスードという求心力を欠いた今の段階で、アフガニスタンを何とかまとめるためには、シャーの力を借りないと、無理かもしれない、と私は思っています。ただ、王様として戻るつもりはなく、息子にさせるつもりもないと言っているから、（北部同盟）なりバシュトウーンなどのいろいろな勢力が合体して、イスラムの選挙管理内閣をつくって、最後には国民の声を聞く、ということを確認に打ち出せば、いまは、シャーでもいいのじゃないかと思えますね。マスードがいたら、彼が中心となつて、民族をまとめあげることでもできたかも知れません。

司会 長倉さんが言われた「自分の足もとを見つめよう」というメッセージが重く心にしみ入ります。ありがとうございます。

（二〇〇一年十月二四日 四谷地域センターで）

他社の出版物との関係で、スライドの一部しか掲載できなかったことをお詫びします。

下記の写真集をどうぞご覧下さい。

●長倉洋海さんの

アフガン関係の写真集（＊印は著書）
『地を這うように―長倉洋海全写真1980-95』（新潮社）

『マスード 愛しの大地アフガン』

（河出書房新社）

『獅子の大地』

（平凡社）

『マスードの戦い』＊

（河出文庫）

『フォトジャーナリストの眼』＊

（岩波新書）

●来春出版予定の本

『子どもたちのアフガニスタン』

（岩波ブックレット）

『もう一つのアフガニスタン―長倉

洋海のアフガン報告』（仮題・新潮社）

●（あこら）の各拠点での写真展開催については、時期が重ならなければ開催してもよい旨、ご快諾いただきました。各地でも開催され、長倉さんやマスードの志が広く知られることを祈っております。

（編集部）

●読者の声

アメリカの「テロ報復戦争」と日本の自衛隊派兵に反対する！

●米国のアフガニスタンに対する軍事攻撃には反対。したがって日本の自衛隊派遣には反対である。

理由は次の三つ。

一、軍事攻撃が続けば、過去二十年間、周辺国や大国の利害の衝突でおしつぶされてきたアフガニスタンの国情は、一層紛糾するし、中央アジアの情勢は一段と悪化する。

二、難民が一層増加し、国内の人びとの飢えと寒さは悲惨の度をつよめる。

三、軍事攻撃でテロを根絶することは難しい。第三世界の貧しい人びとがイスラム原理主義に同調する背景に目を向ける必要がある。

したがって、日本がアメリカの軍事行動に連帯して自衛隊を派遣することは道義のない戦争に加担する行為である。

目指すべき問題解決の道は、米国が経済のグローバル化で貧富の差を拡大している現在の戦略を見直すこと、先進国が国連など話し合いの場を設定して和平に乗り出すこと、自国の利益で干渉することはやめる、テロに対しては国際

的裁判でけじめをつける、等の方向にある。

(埼玉県所沢市 高橋美保)

●高層ビルに飛行機がゆつくりとめり込んでいく映像を見た時、こういう社会にこれから生きていくわが子の行く末が、初めて心配になりました。その後肉親を捜して泣き叫んでいる人びとを見て、何度も見たことがあるような気がしてなりませんでした。

パレスチナだったか、イラクだったか、何度も何度もそれを見ながら、見ていなかった自分に気づき、十月二十日、岐阜市で行われた反戦デモに参加しました。五十人くらいの小規模なものでしたが、私にとつての第一歩です。

(岐阜市 岩田すみ子)

●今回の米国の報復戦争は、自分たちの領土に殴り込みをかけられてメンツをつぶされたのにブツンきて、その感情をいろいろな言葉でごまかしていると思えません。

自分たちの国が建国以来やってきたことを相対化する米国がなぜ憎まれるのかを考えようという発想はないのでしょうか。

さて、日本についてですが、小泉首相は日本国憲法前文の「国際社会において名誉ある地位を占めたいと思うという部分を自衛隊のパキスタン派遣の根拠にしていますが、その前に「専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しよう」と努めているという文言があることを都合よく無視しています。

今回のテロ対策特別措置法案、自衛隊法「改正」は、日本の民主主義と自由を打ち砕くものです。

順序は前後しますが、小泉首相が「国際社会」という言葉を使うとき、彼の頭の中にはどのようなイメージがあるのだらうと思います。

(福岡県前原市 谷 和美)

●米中枢同時テロで一瞬のうちに五千人余の人たちが命を落とした。日本人も数十人を数えた。この非道なテロに対して、ブッシュ大統領は報復戦争を開始した。アフガン上空から、タリバン兵士に向け空爆したが、一部は誤爆によつて多くの市民が亡くなった。ここで、私が考えることは、同時テロと誤爆によつて亡くなった命の重さである。

人の命に軽重はないはずだが、最富国アメリカで亡くなった人たちは世界中から涙をさそい、手厚く葬られ、国家からの保障もある。しかし、誤爆で亡くなったアフガンの民は、たぶん、他の国の人から花輪ひとつ手向けられずに死んでいったに違いない。生き残った人たちがその意味を考えなければならぬ。

(東京都 大竹 進)

●九月十一日以降、毎日、ニューヨーク惨事の様子、多発テロに対する報復攻撃へ突入する報道に言いようも無い不安と苛立ちを感じながら毎日を通(こ)しています。

ブッシュ政権はテロ報復に特化していますが、何故テロが行なわれたかという根本的な問題に真剣に取り組むことが重要と考えます。九月十一日直後即座「報復攻撃」、「新しい戦争が始まった」というような好戦的な態度に終始していることに疑問を覚えざるを得ません。いまや、瞬(と)刻(け)間に第三次世界大戦が始まり、その戦争に自分も巻き込まれようとしているような不気味さを感じます。日本は、中近東における日本の中立的、親日的立場を大切にし、軍事以外の役割を積極的に行なうことが出来ないものか。単にブッシュ政権に追随するのではなく、平和憲法を持つ国として何が出来るかできないかについて、独自の立場、リーダー

シップをとる必要があると真剣に思います。多くの人々にとって（一部の軍事産業を除いて）、第二次世界大戦以降の戦争体験から得た重要な教訓は、「戦いによる勝者はない」と言うことだったことをここでよく思い起こす必要があるのではないでしょうか。

ブッシュはアフガニスタンの人びとは友人だと言いながら、結局、大きな都市を次々に破壊し続けています。報復攻撃による多くの破壊、波及的なさまざまな損失、そして、何よりもアフガニスタンの一般市民を戦火に晒していることは、どうしても納得が行きかねます。

今日（十月十四日）は、ついに、誤って民家を砲撃したとのニュースも報道されました。これに対し、アフガンの人びとのみならず、多くのイスラム人が反米感情を強めています。今後、攻撃範囲がアフガニスタン全土ばかりか、他の国々にも広がってゆく可能性が大いにあります。これらの動きに対し、居ても立っても居られない気持が募る今日この頃です。

九月十一日以降、ブッシュ大統領に対するアメリカ市民の支持率が八〇％以上になっていることにも驚きました。

しかし、ニューヨークの惨事にあつた人びとの追悼集会の際、集まつた関係者たちが政府の報復攻撃が始まつたこ

とを知って、これ以上悲劇を繰り返すべきでないとして「軍事攻撃に対し反対する」とデモを行ない、参加者が一五、〇〇〇人にも上つたと知り、大変胸を打たれました。自分と同じ悲しみをこれ以上他の人に与えてはならないとの深い思いがこのような大規模なデモ行為となつたのでしよう。

テロで息子を失つたニューヨークマンハッタンにあるフオーダム大学のオーランド ロドリゲス教授がブッシュに書き送つた手紙のニュースも感動的でした。その息子は、他人の気持ちにとっても繊細な心を持ち、ユーモアに富み、一緒に居るといつも皆を笑わせてくれてとても楽しい、素晴らしい若者だったそうです。事故で息子を失つてから、今まで味わつたことの無いほどの損失感や悲しみを味わい、今でも、深い悲しみや怒りが湧いてくるという教授は、下記の手紙をブッシュ大統領に送つたと報道されました。

「今回のテロに対するあなたの行動は、私たちの傷を更に深めます。息子の死がその口実になつてるように思えてならないのです」と。

ロドリゲス教授がおっしゃるように、罪の無い子供や一般市民を傷つけることの無いようにくれぐれも慎重に慎重に行動しなければならぬと思います。

（飯田愛子）

中村 正子

(時事通信社文化部記者)

二〇〇三年度の大学新卒者の就職活動が、もう動き始めているという。失業率は過去最悪の五・三％。私たちですら先行きが見通せない中で、今の女子学生たちは、どんな展望を持って仕事探しを進めているのだろうか。

私が某旅行代理店で社会人生活のスタートを切ったのは、一九八五年。翌年に施行された男女雇用機会均等法とその後の女性たちの職場進出は、そのまま自身の職業生活の歩みと重なり合う。「結婚したら仕事は辞める」と決めていた友人もいて、出産や夫の転勤を機に家庭に入っていったが、私は働き続けなければと、自分に言い聞かせてきた。一つには、専業主婦として日々の生活を大切に、趣味の世界も広げながら楽しく暮らす母も、限られた家計費のやりくりはじめ、いろんな不自由さを抱えているように見えたから、かもしれない。

旅行社は当時から女子学生に人気の高い就職先だったが、実際に働き始めてみると、当初の期待とは裏腹に、与えられた仕事に物足りなさを感じていった。同じ支店に配属された同期の男性社員が先輩社員に連れられて営業や添乗に出掛けていくのを、「こうやって男たちは鍛えられていくのだな」と覚めた思いで眺めていたものである。今、振り返ってみると、なぜもつと長い目で仕事というものを考えることができなかったのだろうか、と思う。しかし当時は、そんな気持ちのゆとりもなく、あせるばかりだった。

現在勤める通信社で働くようになって、そうした不満はとりあえず解消された。大手新聞社などに比べ女性記者の数は少ないし、配属先もまだまだ限られているが、私自身は比較的女性の多い職場に配属されてきたから、多くの女性記者が経験する、男性記者との軋轢のようなものにも、幸か不幸か悩まされることは少なかったからかもしれない。夜遅くまで残業しても、つらいと感じるより、面白

さややりがい、男性と同じように働いているという満足感は、いわゆるキャリア志向の女性たちに共通のものだろう。

最近女性元氣だと言われ、働く女性のニーズを当て込んだあの手のサービスの登場している。例えば、女性でも気軽に入れると評判の定食屋チェーン。独り暮らしの女性が増えたが、仕事帰りに一人で食事のできる場所は、なかなかない。そこで、小綺麗な内装で、食材にも配慮した定食を出したら大当たりしたというわけだ。取材について、店の前で観察していると、午後九時をまわるところからスーツ姿のオフィス帰りの女性が次々と駆け込んでくる。

確かに、夜遅く家に帰ってから食事のしたくをするのは面倒だし、ファストフードで済ませるよりは健康的だろう。そんな店が近くにあれば、私だって利用するに違いない。実際、「デパ地下」の総菜売場には結構お世話になっている。しかし、果たしてこの便利さを素直に喜んでいいものだろうか。生き生きと働く男たちを見て、私も、と思ったことはあっても、わずか五分やそこらで昼食をかき込む男性サラリーマンの姿を、うらやましいと思うことはなかったはずだ。

先日、駅前の総菜店に午後八時過ぎに入ったら、客のほとんどが仕事帰りとおぼしき女性だったことに、がく然とした。

ひよっとして、私たちは、やりがい、生きがいの代償に、ほんの少しでも手間をかけて「日常生活」を営むという、生きるために実は大切なことを放棄させられてしまっているのではないか。こんなことを私たちは求めてきたのかと思うと、何だかいたたまれない気持ちになる。

「仕事があるだけ幸せ」といった厳しい雇用環境の中で、「人間らしく働きたい」という思いはかき消されそうではあるけれど、ささやかな生活の楽しみまでも見失わないようにしたいと思う。

試写室

内側から見た アフガニスタン

木下 昌明

『よみがえれカレズ』

1989年・日本アフガニスタン合作記録映画

この映画は、水俣病の究明とその患者たちのたたかいを撮りつづけた土本典昭ら日本のスタッフと現地のアフガンの人々が共同でつくったドキュメンタリーである。

わたしはこれを十二年前に見ていた。しかし当時、何を見ていたのだろうか。ほとんど記憶に残っていない。たぶん、アフガンが社会主義への第一歩をふみだした様子が見られると期待して

見たのだろう。それなのに見たものは一筋縄ではいかない困難な現実だった。それも映画は一方的に切り捨てることなく錯綜した状況こそいまのアフガンだとして浮かび上がらせたのに違いない。こんどの再映にあたって見直してみても、当時の土本らの意図がのみこめた。と同時に、十二年も前の映像なのに、それが現在の戦争と深くかかわっている問題としてわたしにせまってきた。

確かに映画のいまはいまではなく、いまだソ連邦があった時代であり、カ

ーブルでは様々な仕事にはげむひと、帰国した難民のうれしそうな顔、牧歌的な羊の群れ、にぎわうバザールなど、最近のテレビでは見られない活気あふれる光景が映しだされていた。空爆下のいまを見るにつけ、これらの映像は過去というよりもむしろ未来ではないかと思わせてしまうほど。そこに、いまに至る愚かしくも錯

乱した歴史があったわけだ。

映画の時は、一九八八年の春と秋。ジュネーブ協定で大量の難民の帰国をうながす「国民和解」が宣言され、アフガンが非同盟中立国として歩み出すこととなる。そしてアメリカの反政府軍への支援中止とソ連軍の撤退がはじまる。そのソ連戦車隊の引き揚げシーンでは、故郷に帰る女性兵士は喜びに笑いがとまらない——彼女の表情に和平へと向かうアフガン民衆の気持ちが集約されているようにみえた。

しかし、それは次の内線のための小休止でしかなかった。映画はそれを予測させる面にも光をあてている。その一つが、突然バザールにロケット弾がうちこまれ、大勢の死傷者が出たこと、それを撮影隊が現場にかけつけてカメラに収めているが、肉片のとびちった光景は無惨としかいえない。また、緑なすオリブ林とその加工工場が新設されたに



© 桑原史成

●「よみがえれカレーズ」/116分/記録社・シグロ
作品/監督:土本典昭 熊谷博子・アブドゥル・ラティフ
上映日程:~11月30日 毎朝10時15分
よりBOX東中野にて上映 [Tel.03(5389)6780]

もかわからず、反政府軍の妨害で閉鎖に追いこまれる。さらに「殉教者の丘の墓地」で、無数の戦死者の旗が風ではためているシーン。一人の母親が死んで間もなくの息子を思つて墓石に語りかけている。それがまるで一遍の即興詩を聴いているようで哀切——こうした光景にも和平とはほど遠い状況にあることがうかがいしれるのだ。

それと同時に、カールブルでは社会

主義的雰囲気を感じる場面もあったが、西部のヘラートやその郊外の村では、モスク(寺院)の修復に職人たちが精を出したり、信者たちが輪になつて力強い声を発して祈つたりと、イスラム教信仰の根ぶかさとそれにまつわる因習とがとらえられていた。

なかで興味深かったのは、元反政府ゲリラだった村の指導者の中庭で、チャドルをとった素顔の女性たちが二人の女性スタッフと雑談しているシーン。彼女たちは、女同士という心安さもある。つてか、男尊女卑の風習について、夫一人に妻四人を「よくない、一人がい」とはつきり批判している。このように、

映画はアフガンを内側からとらえていて、それをいまの問題と重ねると、

当時は見えなかったものがよく見えってくる。それは土本らが、この国の民衆にとつて何が基本かを押さえた上で現実の錯綜をそのまま浮かび上がらせているからだ。そしてその基本とは生命の源、水のことである。アフガンはいっけん不毛の大地に見えるが、その地の下には雪どけ水が流れていて、これをカレーズという。この無数のカレーズを中心に人びとの生活が営まれている。まさに水路によつて「砂漠に花が咲く」のだ。これを基本に、いかに過酷な現実と向かい合うかを問いつけているところにこのドキュメンタリーの真骨頂がある。

わたしたちは、ブッシュが仕かける石油利権と軍事産業のための戦争にだまされないうえにも、アフガン問題をカレーズの視点からとらえ直す必要があろう。

(映画評論家)

朗読会でウチナーグチを

前原 弘道

沖縄に住んでいる人はどこへ逃げたらい？

北島角子さん(知る人ぞ知る沖縄芝居を代表する女優さん)が、ある日、ある所で私にこんなことを言ったのである。

「ヤマト(本土)の人は沖縄が危ないからと言って沖縄旅行をとりやめることができるけど、じゃあ、私たちが沖縄に住んでる者はどこへ逃げればいいのかねえ……」

もちろん今度の同時多発テロとアメリカの報復戦争、そしてその影響による沖縄への修学旅行、観光旅行のキャンセル続出という一連の事件に關しての言葉である。

今朝(十一月三日)のテレビニュースでも、アフガニスタンからお隣パキスタンへの避難民の数は十万人を超えたと報じている。アフガニスタンではそれでも国

境を越えれば逃げるところがある。しかし沖縄では？
まわりは海である。海へ逃げろとでも？

はるか昔、日本復帰前「基地の中に沖縄がある」と言われ続けてきました。しかし、復帰後三十年経ったいまも、やはり「沖縄は基地の中だった」ということを今度の一連の事件は如実に示しているし、沖縄に住む人びとは、またまたその置かれている立場、現実というものをあらためて再確認させられたのではないだろうか。

先の北島さんの言葉はしたがって、いまの沖縄の人びとの気持ちを最大集約、代表する言葉として、まさに千鈞の重みを持って私の胸にどすんと響いたのです。

ところで、私と北島角子さんが、ある日、ある所でなぜ会って話をしていたのかということを説明する必要があるそうです。

ある日というのは、今年の十月三日、ある所というのは那覇市のRBC放送局一階の喫茶室ということになります。そこで北島さんにお会いしたのは、北島さんに私の朗読会へゲスト出演をお願いするためでした。というのも今年十二月十一日に那覇市の女性総合センター「ていえる」ホールで、私は第六回目の朗読会を開く

予定で、そのプログラムのひとつに、ウチナーグチ（沖縄地域語）の名手でいられる北島さんに、「平和憲法」第九条をウチナーグチで読んでもらおうと思いついたからです。

美しい共通語、美しい沖縄ことば

私の朗読会は、一九九三年に第一回目を那覇市のパレット市民劇場で開いて以来、東京公演を含めてこれで六回目となりますが、前回までは沖縄出身の詩人、山之口獏の詩や随筆の朗読をメインに据えて来たのを、今回はガラリと趣を変えて、タイトルを「実践にほんご面白講座」とし、テーマを「よむ」ということにしぼって試みることにしたのです。

私が長年そこで勉強を続けてきた『山本安英の会』がなくなつてから八年になります。会が「ことばの勉強会」で追求してきた三つのテーマ、「日本古典の原文朗読」「デクラメーション」「地域語」の問題を、今後も私なりに追求し、深めて行きたいというのが、今回の企画を思い立った大きな要因です。したがって今回は、「平家

物語の群読」（古典）、「山月記」（デクラメーション）、「憲法九条をウチナーグチでよむ」（地域語）と、前記三つのテーマをひと通り揃えたプログラムが出来上がりました。

ところで、なぜ私が沖縄にこだわって「朗読会」を開くのかと他人からよく尋ねられます。簡単に言えば、まず私が沖縄出身の俳優であるということ、もうひとつは、本土の人より沖縄の人たちのほうが、どうも自分たちの「話しことば」に敏感であるということ、この二つが私をして沖縄にこだわらせる要因になっているようです。

なぜ沖縄の人たちが自分の話しことばに敏感なのか——原因はいろいろあるでしょうが、かつて日本政府の皇民化教育によつて徹底的に行われた「方言撲滅運動」に対する反動・反撥があるのではないかと思います。いま沖縄では、美しい共通語を話したい、そしてまた美しい沖縄ことばも話したい、という根強い動きが芽吹き始めています。

（まえはら ひろみち／俳優・へ前原弘道の会主宰）

語りかけたいあなたへ 40

大里知子

切ない涙

男女や大人、子どもを問わず、泣いている姿や涙ぐんでいる顔を見るのは辛い。辛いというより切ないと言ったほうがピッタリくる表現なのかもしれない。とにかく私は、大人や子どもの泣いている光景にあうと、胸のあたりがキューンと切なくなつて、どうすることもできなくなつてしまう。

*

私は、野球のルールが分からなくて、いくら教えてもらつても駄目なのである。結局は、私に真剣に覚えようという気持ちが出来ていないことになるのだと思う。そんな私も、甲子園での全国高校野球大会のテレビは見てしまう。見てしまうと、試合そのものを見るわけではなく、プロ

野球の選手と違い、ガッチリした身体の何処かに、きゃしゃなあどけなさを感じて、なんとなくほほ笑ましく見ているのだ。そんな幼さの残る高校球児がベストエイト、ベストフォーと試合が進むうちに、惜しくも敗れたほうの選手が、甲子園の土を記念に持ち帰るためビニール袋に土を入れながら、ポロポロと涙をこぼしている姿は、テレビの画面をとうして、その切なさが自然に伝わってきてしまい、こちらでも思わず目頭に熱いものが込みあげてきてしまう。全国高校野球大会だけは、全部の出場校に優勝させてあげたい衝動にかられる。

涙と言えば、私の子どもの頃の母の涙も、切ないものとして思い出される。まだ小さかった私には、その涙の理由は知る由もないのだけれど、母の泣いている姿をよく見かけたものだ。終戦とともに、父の郷里である花輪へ中国から引き揚げてきて、周囲は父の親戚と知り合いだけのところへ入り、厳しい姑と過すことも母にしてみれば大変なことだったのだろう。私は、母が涙をこぼす度に、泣いたあと何処かへ行ってしまうて、もう私たちのところに帰ってこないのではないかと、子ども心にずいぶん心配したものだ。そんな母も、いまは九一歳になって、泣いているところはほとんど見られなくなった。

長い人生を経て、涙も枯れてしまったのかもしれない。

自衛隊派兵、最大一五〇〇人を閣議決定

政府は、十月二十九日に可決された「テロ対策特措法」に基づいて、最大一五〇〇人の自衛隊員、艦船六隻、航空機八機を出す基本計画を、十一月十六日夜、臨時閣議で決定した。

「情報収集」の名目で先発している三隻は、防衛庁設置法によるもの。今回の決定に関して、防衛庁首脳は「艦船の行動は古くからの慣習で明らかにしないもの」と述べており、国民への説明責任を、事実上回避。小泉首相は、「テロとの戦いに、いろいろな支援、協力態勢ができあがったと思う」と、アフガニスタンの情勢を顧慮しない、米国一辺倒の発言に終始。実質改憲が着々と進められつつある。

遺族年金、「働く女性」優遇へ改革か

働く女性と専業主婦の「年金格差」は、かねてから問題にされていたが、厚生労働相の諮問機関である「女性の年金検討会」

は、二〇〇四年からの改革として、夫と死別した女性が、全く働かない、いわゆる専業主婦として老後を迎えた場合の遺族年金の給付を抑制し、働いて厚生年金に加入したほうが、年金が増える仕組みとなる報告書案をようやく提出した。

また、パート労働者は、現在は正社員の四分の三以上の就業時間でないと、厚生年金に加入できなかったが、これを二分の一以上に引き下げるほか、年収六五万円以上でも厚生年金への加入を義務づける方向が考えられている。

月八〇時間残業で過労死認定に

増加し続ける過労死は、交通事故死を上回り、大きな社会問題になっているが、厚生労働省は十月十五日、過労死の労使認定枠を大幅に緩和することを決定。現行では過労状態は「発病前一週間」とされていたのを「六か月」に拡大。疲労の蓄積となる残業時間の目安を「発病前一月百時間以上前」から、「発病前二か月、三か月、四か月、五か月、六か月の各期間のい

ずれかで、平均八〇時間以上」の残業で認められるよう、条件を緩和した。

厚生省、母子家庭への「児童扶養手当」抑制へ

ここ数年、毎年一万余千件ずつ増えている離婚の急増で、財政が厳しくなったことを理由に、厚生労働省は、現在は所得から除外されている元夫からの養育費を算入し、給付期間も短縮するなど、給付抑制のための具体的方法を検討し始めた。

母子世帯の平均年収は、全世帯の三分の一（約二二九万円）であり、元夫から養育費の仕送りがない世帯が約八割にのぼるのが現状であるなか、政府の社会保障関連予算をカットする方針は、弱者切り捨てとの批判も多い。

第三回「地の塩賞」に中村文子さん

「地の塩のような働きをした女性」を対象に、名もない女性たちの拠出金で表彰を続けている「地の塩賞」。今回は、沖縄で一フット運動を提唱し、平和・人権運動の裏方を続けておられる中村文子さん（八八歳）に決定。

テロの余波で更に厳しい状況に置かれている沖縄。「中村さん

を東京にお招きして」の声も多かったものの、ご本人の体調を考えると、十二月十二日（水）午後六時から、沖縄市女性センターで表彰式と懇談会が行なわれる。

参加される方は、お早めにお申し込みを。

申込先は（あごら）内「地の塩賞実行委員会」まで。

「新聞にみる新潟女性史年表」に文化賞

新潟女性史クラブ（代表・塩沢啓子）が、今年二月刊行した、県内初の女性史年表『光と風、野につむぐ一連譜 新聞にみる新潟女性史年表』に、十一月一日、新潟日報文化賞が与えられた。

一八六八（明治元）年から一九四七年までの県内女性の歩みを、主に「新潟新聞」から四三〇〇項目を収集。記事の取捨選択に試行錯誤の十四年間であったという。「女性史を学ぶ私たちが、世界平和のために今できることは何だろう」と考えて、四分の一が戦争関連の記事となったが、男女共同参画社会に向け、このような刊行物の意味は大きいと、高い評価を受けたもの。クラブには、塩沢さんはじめ多くの（あごら）会員が参加している。地道な努力を重ねられたことに、心からの賛辞をお送りする。

浜岡原発一号機事故に政府狼狽

運転開始二〇余年の浜岡原発に、ついに深刻な事故が発生した。導入の際、市民運動は「経年後の危険性」も厳しく追求したのに一顧もされなかったことが改めて思い出される。政府もさすがに狼狽。各地の原発反対運動は勢いを得ている。

二〇〇一年は「ボランテア国際年」だが

今年は「ボランテア国際年」。これは第五二回国連総会で、日本政府の提案により定められたのだが、残念ながら、日本政府は、アフガニスタンの惨状対策も自衛隊の派遣に特化、NGOの助成には微動もしない。

「ボランテア国際年」の締めくくりとして、十二月一日／八／九日に、講演会やイベント、ワークショップが開かれるが、「自衛隊かNGOか」を改めて話題にしたい。

自由法曹団女性部、防衛機密保護の改悪に反対

自由法曹団女性部は、「報復戦争参加法案」反対の意見書を作成し、特に、自衛隊法「改正」案について、かつての国家機密法

案の内容より一層広く「機密」事項を定めることができる内容となっており、国民の知る権利をはじめとする言論の自由を明らかに侵害する内容であることに注意を促した。マスコミ各社が、これを報道していない問題も指摘している。

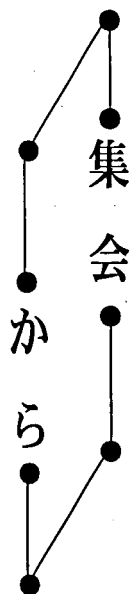
この内容に関しては、本誌特集、奥平康弘教授の講演録「質疑応答」の部分に詳しく説明されているので、参照されたい。

米下院・リー議員の「報復戦争」反対の議会演説

バーバラ・リー議員は下院で、ベトナム戦争と同じ過ちを犯してはならないと呼びかけ、ただひとり、米政府の軍事行動による「テロ報復」に対する異議申し立てを行なった(四二〇対一)。

リーさんは、「この「反対」投票がどんなに困難なものであるうとも、私たちの何人かが自制を行使するように、説得しなければなりません」「残忍な殺人者によるこの狂暴な行為に対する正当な怒りがあるからといって、あらゆるアラブ系のアメリカ人やイスラム教徒や東南アジア出身者や他のどの人々に対しても人種や宗教や民族を理由として偏見をあおることはできません」と演説し、大國意識とは対極の、本来的意味での国際人としての見識を披瀝した。

(全訳は、「ピースネットニュース」二〇〇一年十月十日号に掲載)



女性議員が増えれば社会が変わる

WINWIN（代表Ⅱ赤松良子）は、一人でも多くの女性を政治の場へ送り、日本社会を変える原動力にしようという女性候補者支援のための募金ネットワークです。

去る十一月一日、憲政記念館にて、支援を受けた鎌田さゆり、水島広子、田嶋陽子、有村治子、上田恵子、幸田シヤミ、黒岩秩子、吉川まゆみさんをパネリストに、円より子さんが加わり、岸井成格（毎日新聞社記者）さんの司会で第一回シンポジウムが開催されました。

WINWINの支援を得た結果、資金面での援助はもちろんのこと、知名度が上昇、得票数がアップしたという声が多くあがった。

「女性が議員になることは、総花政治が変わることであり、これまでの陰の世界が表に出るということ」、という意見がある一方、「フェミニストの視点のない人は、女性

であっても議員としては不適応」という意見もあり、選挙運動中に某候補者が「主人に相談して」という言葉を連発していたというエピソードには、会場からどよめきが。

推薦は、女性の権利と地位向上、男女共同参画社会の実現への熱意と同時に、専門分野をもっていることが条件ですが、平和社会実現も入れてほしいところです。また、年会費一口一万円。選挙時には、一人の候補者に対して一口一万円の献金という仕組みで運営されていますが、これではかなりの高額所得者でなければ会員になれず、特別な人のための組織になってしまうのでは……。

選挙時に五〇〇円、一〇〇〇円をカンパし、手弁当で応援する形がより女性たちの選挙にふさわしいように感じましたが、パネリストたちの熱い思いには心打たれることが多く、是非とも次回選挙時には候補者全員を国会に送り込みたいと思いました。（金子裕美子）

テロにも、戦争にも、自衛隊参戦にも反対！ ——11・3憲法集会

十一月三日、都内文京区民センターで「許すな！憲法改悪・市民連絡会」の主催による「11・3憲法集会」が行わ

れた。米国によるアフガニスタンへの報復攻撃が始まってから約一か月。「小泉さん、そんなに戦争がしたいのですか？ 私たちはテロにも、米国の報復戦争にも、自衛隊の参戦にも反対です。アフガニスタンの人びとを殺すな！ 憲法九条を守れ！」と題し、三〇〇人ほどの市民が集まった。

実行委員の高田健さんは、今回の米国のテロ報復戦争では、日本に直接爆弾が投下されることも、大本営からの「勝った、勝った」という報道があるわけでもないために、戦争という現実への実感が少ないが、国民の一人一人が想像力を発揮して、戦争の現実を知る必要を訴えた。

小児科医で衆議院議員の阿部知子さんは、辻元清美衆議院議員、北川れん子衆議院議員とともに報復戦争開始後の十月二〇日から二四日、ベシヤワール会の中村哲医師を窓口にあつたアフガニスタンを視察。タクシートの運転手さんをはじめ現地の人たちから、「アフガニスタンの人たちにとって、原爆、平和、憲法というイメージにある日本が、なぜアメリカのテロ報復戦争に協力しているのか」と話しかけられたと、スライドとともに報告。

三輪隆さんは、日本政府による自衛隊派兵とテロ対策特別措置法成立の意味と、日本国憲法と日本社会への今後の影響を憲法学者の立場から説明。アメリカのテロ報復戦争

に対する日本政府の対応については、「明文改憲への新しい一歩」「法律は通ったが、国民の声によつて自衛隊の行動など、政府の意図を限定させることは可能」と述べ、国民としては「実際の法律の適用内容を常に監視し、現状について、の事実を知ることが必要だ」と訴えた。

沖縄から駆けつけた新崎盛暉さんは、「弱者の抵抗手段としてのテロと、強者の支配手段としての暴力を同一次元におくことができるか？」「テロと同様にアメリカの報復攻撃が罪なき人びとを道連れにしているのは明白な事実」と、弱者をテロに駆り立てる原因に、アメリカの覇権主義をはじめとする強者の暴力的支配が関係していることを指摘。広島・長崎への原爆投下のような無差別で大きな犠牲を伴う暴力行為を正当化する理論として、「これ以上犠牲者を増やさないため」「戦争を早期に終結させるために」などと歴史的に支配者側から語られてきたが、「やむを得なかった」と言い切れる「犠牲」はひとつもないことを強調した。

沖縄では、観光産業が大きな痛手を被り、「基地被害」という声もあがっているという。「支配者の暴力」は、常に弱者に押し寄せる。事態の全貌を見るよう努めなくては、と痛感した。

◆「政治」に関わるというのは本当に「しんどい」仕事です。特に日本において、女性として反自民、反保守としての立場に立つという事は。

世の中ほとんどおかしくなっています。「ふつうの人の考え」をじっくり学び、次なる「政治的行動」を考えられています。
(新潟市 内田洵子)

「映画『人らしく生きよう』に涙」

◆久々に映画を見て泣きました。タイトルは『人らしく生きようー国労冬物語』。一九八七年の国鉄の分割民営化の際、国鉄労働組合員はとくに「首切り」など差別の対象とされましたが、映画は、その後十四年にわたって闘い続ける国労組合員たちを描いたドキュメンタリーです。

「いくら顔にシワが増えようとも、私たちは十四年前から時がとまったままなのです」。国労家族の会の藤保美年子さんの国労大会での演説が庄

巻。「人として生きる」とは？ 取り戻さなくてはならない大切なものって？ しやつくりが出るまで泣きながら、しばし黙考。
(犬)

（11月30日まで東京・BOX東中野にて上映。TEL 03(5389)6780）

「お詫びと訂正」

二六九号一ページ十行目、「拘束名

簿式」は、「非拘束名簿式」の誤りです。また、二七〇号は、多数の誤植がありましたので、刷り直し、二七一号とともにお送りすることしました。非常事態の発生で、「一日も早く情報を」とあせっていたとは申せ、誤植は許されることではありません。情報の（あごら）の原点として、今後はいっそう心を引き締めて発行したいと思えます。恐縮ですが、先月お送りした二七〇号は廃棄して、今回お送りする分をご活用ください。深くお詫び申し上げます。
(編集部一同)

「活動資料に『あごら』を」

二七〇号、多くの方からご注文を頂き、ありがとうございます。二七一号も活動資料にご活用ください。

勉強会などの資料用には、二七〇号は三〇〇円、二七一号は四〇〇円でおわけします。
(事務局)

「〈ネコ〉の手」余録」

二七〇号でお詫びを掲載しましたら、「〈ネコの手〉は、あごらには珍しいユーモアでよかったのに」「そのお詫びよりも、誤植をなくすための努力を」など、いろいろな反響がありました。結果として、「〈ネコの手〉でいいなら私もお手伝いします」という方がまた増えて、大助かりしています。

（あごらめいと）のやさしさが、改めて身にしみましたが、それに甘えず、「お詫び」を出さなくてすむよう、いっそう努力します。

(編集部一同)

「あぐら」は、人と人が出会うひろば——

思い悩んだとき、もつと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……。心おきなく話し合える仲間がいる……。そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あぐら」を軸に、よりよい自分と社会を目指す ゆるやかな連帯。「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

会費は月刊「あぐら」の誌代込みで月額七百円。一年分前払いが原則ですが、ご相談に応じます。入会金は千円。ハガキかFAX、電話を頂ければ、申し込みカードをお送りします。

「BOCC」の登録も、どうぞ……

一九六〇年に生まれた「BOCCバンク・オブ・クリエイティビティ」は、創造力の銀行。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご連絡ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな創造力でも歓迎！ ただし、半年以上「あぐら」会員の方に限ります。

連絡先

どちろも 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-9-4 中公ビル
☎03-3354-3941(代) FAX03-3354-9014
Eメール XLV05467@nifty.com

あぐら 271号 テロと日本の危機II ●発行2001年11月20日

●編集 あぐら新宿

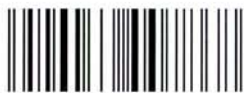
●発行所 あぐら編集部 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-9-4

●TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com

●定価 本体786円＋税 ●振替 00100-0-5264



9784893061195



1920036007868

ISBN4-89306-119-4

C0036 ¥786E

F160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体786円+税

企画・編集・翻訳…
何でもご相談ください

創業1960年 —
女性専門職集団
BOC

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354・3941 ㊟3354・9014

E-mail XLV05467@nifty.com.

NPOウイン女性企画

〒460-0008 名古屋市中区栄3-28-2

☎052-251-9109 ㊟261-8778

見えない戦争

第2回ブロンズ賞受賞

斎藤千代 著 四六版 352ページ
1785円送料サービス

見えない戦争
私が訪ねた戦後の湾岸／イラク・パレスチナ・イスラエル……
斎藤千代



湾岸戦争の真実を追求！
今こそ必読の書

緊急学習会 テロと日本の危機Ⅲ,Ⅳ

◆アフガン難民と現地で暮らして 永井真理氏

11月22日(木)18:00～20:00／新宿区立女性情報センター(都営新宿線「曙橋」)

◆アフガニスタンの実相と国際的テロリスト 酒井啓子氏

11月28日(水)18:30～20:30／四谷地域センター(丸の内線「新宿御苑前」)

〈問合せ〉 あごら／TEL03(3354)3941

FAX03(3354)9014